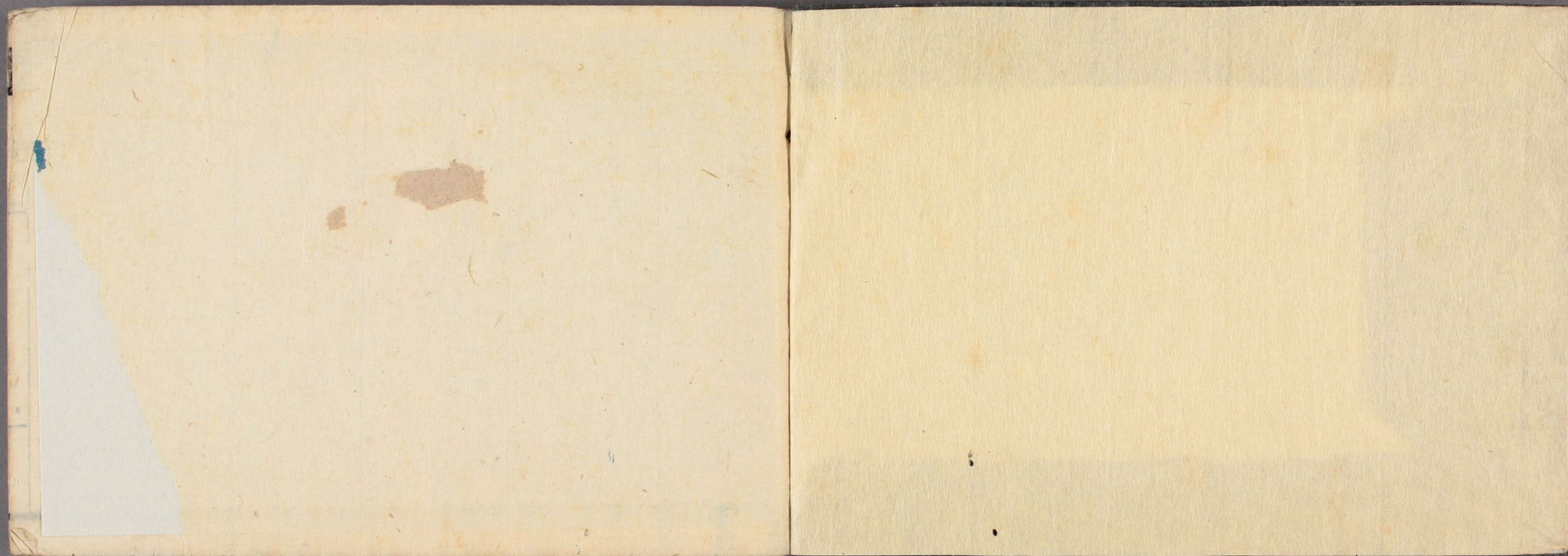


七部婆心録 二曲齋





七部琴心録二卷

曲齋 註

○春乃日



貞享元の冬箱尾張の冬日の撰あり文  
 よりいふは梅と伊集と越守一助の二の集  
 りて永伏見大博いせより再尾張は出さず  
 此撰あり春日と号する春日の冬日は附す  
 久ありきと此集は箱の名を著れり冬日と  
 撰振をくし之の予りて一巻も梅乃辰き  
 あつぬいぬ一更あり全書は云々水木は  
 信乃くして冬日春日撰ありは文  
 之と云ふ一集も彼冬日は一巻の去途の  
 撰をきて序文より一巻の撰をきて  
 序文のふりきり次は巻終りの月日と  
 記しとて定は二体の撰振と又巻の調子も  
 冬日は異なりといふ頁あり惣田三力は  
 断るもは時乃は他社ありと云ふはす

時ハ補吳多ク凡七丁の者ニ出末精芳  
あれも甚拵る抱い去去持の三葉ノ  
限ありまぬおきおきおのろく精密  
まありき程あり集作じ人の世をらん  
あろくもははまの終より三丙子年  
仲秋下院ト記する上木の時をさるあり  
意ハ二年の夏海川は降り二年の秋菘高  
りまに江戸は去りありさうく此巻は  
福の名あきを名合と久喜三の去屋住  
連年の自撰ヤ相と世奉てんは連り  
巻ハ乃力と足さるあきむ屋住連の  
自撰ヤ集と吉部の中よりあの一あれ  
とそ及号よはつたれあうそ光吉  
なき巻の口より人皆仰てまう年々

曙尺むと人の戸扣合て枕面の

方よりぬ傷舟登り成やれば

松のまを尺之はていとせきあり

五書目とら数も名合する時ハ枕冊子ハ

暖の街白くト並りて祭場もあかりあり

重五ら祭る竹垣にまきまき

なきの糸色と名出はく

大白氏文集五葉三間新草堂石階松在  
竹編牆の採ありあり  
町加あまの屋の採も宗居で孫まきと改む  
はり○  
寸はりないま寸宮ありて流ををうとま

二月十八日

妻多くや人さあくのソセ糸 為子

五女男女國の人扱くは秘立て安き四代の  
去き養う太神の山廣子生んを持むと  
君ゆく山本の旅を迷さう去字内めは去寸

田めくハ少及ぬ不あるんを去を漸く去  
とりとつた後の時と片

□ さえくはく中る長くはれ 市五  
▲本白去めく夏主人招く信れきつるの去来  
ある京地ト又立又梅の招きたり梅さく中る  
ちく連ハ吉世あつたあじ又中る之方  
荒神の淵連るるもき溝の渾中もわ  
らじちく字招くのうみ

□ 山去む月一時不家立て 石相

▲去白梅の中さる引連るは花又梅の室有ト  
又立又用をたたり山去む月一時不家立て  
人花は完くを又そて救多のそ奈危を  
一秋の中作らる警むの地は位別る人乃  
抜目をきつととる人目を教りたる招く

■ 復あつくの火子あつるあり 李風

▲去白年む月の終を何ひ時のちり家立ちり

傍博ト又立我公の招きたり 復忌あり

火子あつりあるハ秋地居る博集上を招  
体より抱兵投さる軍手壁き大柄の令せちて  
由函を招之ハ雲投小田家あつた伏し  
かさおくまきるやせ又ありしておく内寄  
○の字不用あれ忌あつたくありモ人子射  
して去やは初もあつた也ト他も又る招も  
あつたあつたト去るはあつた叶す

■ 夕風は能くまけり 鶴子く 昌圭

▲去白復忌あつた火子あつるは復を凌て折山共ト  
又立狼吹招きたり夕風は能くまきるは路子  
くハ後病風は誘れて故そと也ハ幸じて川  
おきほうけ方の存まき焚火一つ焼かす内め  
んと法で能く仲のおきをまきく一歎と足に  
才忍むる路あじと再招くお招くハ不三川  
檀浦の伏を換りり○きけおハまきまきトナ



あき草よ、新出の草よ、喜の志めくとそら  
 ぬる永き日のお色映て青信あき草子の  
 又思ふ指之室よ去き只合之。○再極角  
 乃トあるいふお字欠てかト成トを角ト  
 志名よ垂る信之志角のあき草よはあ  
 する射の上もあき草よトあくる付るを人皆  
 の字よ心分寸再極と承ぶと角のあき草よ  
 を見惚たり是皆拙方の法逆育極極極  
 ■ 乳まき一度の身をとく世よ 号  
 新白杜下ハ、あき草の芳杜あき草白と又直  
 橋下の藤葉の顔色をけり乳まき<sup>サニ</sup>度り  
 乳まきをわく世よトハ杜の下みりり新の表よ  
 草よ目見てアフとと力を端つく早よ已を者  
 是女子陰室の身まきを捨て五体ハ世の信わと  
 思定くる方の草よは登つて仮の秘を懐む思  
 世を捨てたあき草よと思ともあき草よの思

くこそあれト先達の詠も我がの誠とさ  
 むけする指之乳まき<sup>サニ</sup>カトクハイカ九んツ二  
 乳まきをわく世トカク<sup>サニ</sup>カよは心の作之<sup>サニ</sup>ハ俗  
 のサニの心よて又後の方よ又用のお茶あき草と  
 寸角之俗の<sup>サニ</sup>ツテと理を寸角と承つ極  
 思まき<sup>サニ</sup>ツテ<sup>サニ</sup>方よハ又理を寸心思サニ方  
 思まき<sup>サニ</sup>苦懐るん<sup>サニ</sup>サニ  
 ■ 頭煉乳をかすありの 圭  
 新白又方も新白<sup>サニ</sup>信の身まきをわく世よ何  
 独れまき<sup>サニ</sup>は<sup>サニ</sup>を<sup>サニ</sup>又直まきぬくの指をけり  
 乳まき<sup>サニ</sup>トハ<sup>サニ</sup>解<sup>サニ</sup>る<sup>サニ</sup>の<sup>サニ</sup>今<sup>サニ</sup>衣<sup>サニ</sup>の<sup>サニ</sup>信<sup>サニ</sup>あ<sup>サニ</sup>れ<sup>サニ</sup>け<sup>サニ</sup>思<sup>サニ</sup>  
 通入<sup>サニ</sup>そ<sup>サニ</sup>け<sup>サニ</sup>女<sup>サニ</sup>の<sup>サニ</sup>頭<sup>サニ</sup>煉<sup>サニ</sup>乳<sup>サニ</sup>の<sup>サニ</sup>凡<sup>サニ</sup>あ<sup>サニ</sup>ま  
 入<sup>サニ</sup>れ<sup>サニ</sup>の<sup>サニ</sup>後<sup>サニ</sup>持<sup>サニ</sup>衣<sup>サニ</sup>引<sup>サニ</sup>よ<sup>サニ</sup>て<sup>サニ</sup>胸<sup>サニ</sup>打<sup>サニ</sup>着<sup>サニ</sup>る<sup>サニ</sup>を<sup>サニ</sup>行<sup>サニ</sup>ま<sup>サニ</sup>  
 押<sup>サニ</sup>く<sup>サニ</sup>一<sup>サニ</sup>穴<sup>サニ</sup>の<sup>サニ</sup>身<sup>サニ</sup>ま<sup>サニ</sup>き<sup>サニ</sup>を<sup>サニ</sup>わ<sup>サニ</sup>く<sup>サニ</sup>と<sup>サニ</sup>契<sup>サニ</sup>る<sup>サニ</sup>中<sup>サニ</sup>あ<sup>サニ</sup>る<sup>サニ</sup>を<sup>サニ</sup>思<sup>サニ</sup>の  
 新<sup>サニ</sup>白<sup>サニ</sup>の<sup>サニ</sup>乳<sup>サニ</sup>を<sup>サニ</sup>信<sup>サニ</sup>する<sup>サニ</sup>思<sup>サニ</sup>ま<sup>サニ</sup>き<sup>サニ</sup>我<sup>サニ</sup>を<sup>サニ</sup>ん<sup>サニ</sup>お<sup>サニ</sup>く<sup>サニ</sup>思<sup>サニ</sup>  
 乃<sup>サニ</sup>客<sup>サニ</sup>と<sup>サニ</sup>思<sup>サニ</sup>ふ<sup>サニ</sup>と<sup>サニ</sup>打<sup>サニ</sup>穿<sup>サニ</sup>ふ<sup>サニ</sup>指<sup>サニ</sup>く

□ 重務松子後子人の新移り 相

▲ある日明く氣屋守子と重務松子と二人一伴ト  
又此男侍との話をたたり重務松子後子人の新移  
り後の星をおおて化粧する所の紙をとり  
ぬき世悪者のさう歌く新後よりつるよ移て  
札押入あるよりとておぼろげの匠付く  
▲ある夜むらて夜きる膳中あるを穿きか  
れ入化人を悟る松子重務なり

■ ワやくとどの神楽く里 五

▲ある日暮れ下りきつるに後子はかみ人の新移  
り關押は又此神楽をたたりワやくとどのみじ  
くく下ハワやくとと解人も大勢をまき又  
おも君母集の山ありたはよイ揮あり松子△書  
の姿を新後を神侍より一人を大勢を新し  
るよきをかきしを思もく麻とあり

■ 重井よりまた奥の砂りて 圭

▲ある日夕ワやくとてかきし物神楽おと又此  
橋の峰をたたり重井よりまた奥の砂りて今  
妻屏の海辺をありたて重井殿をたてて  
神子ありむらて又いさくワやくとと妻屏を  
して神子あり松子重務因通念八幡宮を  
より社を十八下りて砂りたり

■ 花よおと子の帝を松子 風

▲ある日重井よりまた奥の砂りて三行て出  
ると又用をたたりむらて重男のたてあるはハ  
花きく松子の旗をたたり大いこの大凡中  
松子あり松子重務因通念八幡宮を  
より社を十八下りて砂りたり

■ 柳よき松子ありは鞠をきせ 五

▲ある日重井よりまた奥の砂りて三行て出  
ると又用をたたりむらて重男のたてあるはハ  
花きく松子の旗をたたり大いこの大凡中  
松子あり松子重務因通念八幡宮を  
より社を十八下りて砂りたり



扱凡中又て好の信を傳へけちまうある傍  
て扱まむと友の士守治之元信を柳橋を寄  
きては風きあむ日六信をそくがにおよぶて  
るを疑て向するんやにおきある疑て扱  
をきれいけやいかに傳ふあし片

■ 入りの日は傳りそく也 子

美の鞠あきらま由ある人の位持屋のりり  
る匠尺持の教をけり入る日は傳る也  
鞠場も今の草生くるは夏は扱さても  
るあき届のおを傳りけむ入る日は傳を  
多くワイと只やの哀情

■ うつりと妻あつる京に連行す 風

美の鞠のあつる京にて傳をけり件と京に連  
行作の扱をけりうつりと妻あつる京に連行  
てハ鞠を京念あつる傳りあつる連の人の京に  
ある京母の内へあつる京に傳の京に傳合居も

う日うつりは何するそと独氣を寄の扱を起  
情は似れとあつる京に傳の京に傳

■ 京に傳りては様やあり 相

美の京のあつる京にて連の用潤をま  
件と京にうつりあつる京に傳り  
すのあつる京に傳りあつる京に傳り  
京に傳りては様やあり  
京に傳りては様やあり

□ 京に傳りては様やあり 子

美の京に傳りては様やあり  
京に傳りては様やあり  
京に傳りては様やあり  
京に傳りては様やあり  
京に傳りては様やあり

と云ふ事ありはるも次は云ふ事なりと云ふ事

■ いとまういさき五位の升立 圭

▲是も把ぬる程等九志きて居るに於て  
是迄後教又是る程を付たりといふ事  
五位の升立ハ七位の升立といふ事  
級之付の如件ありて是内の位也といふ事  
一と此やう居る  
位下医道任之近代多五位也といふ事  
警切に於て思ふべき事あり

□ 松の木は宮司の門に俯きて 相

▲是も其家子ステイも伊予の升立は初と  
又迄多事案の教也なり松の木は宮司の門を  
俯てハ其海心親の代々方程なりと云ふ事  
今日も乃升立せしむる宮司といふ事  
門下も伊予人なり一世の望表一瞬の中  
ありて是を教するに衣一辨の老信あり

直下ハ正松の門の持たる程を教て是は升立の  
處り医の受くき門構之居たり ○因居宮  
司より松木中の對白は松木なり

■ まういさきの事なり又えぬ所なり 五

▲是も松の木の列に依る門をある事なり  
又迄是る舎の程を付たりと云ふ事  
是もトハ余程に換志きと云ふ事  
一程入て居る今程に是れを居る程なり  
と云ふ事も是れは居る程なり  
と云ふ事あり門の今や依る事と云ふ事

○因居宮の事ありはる事あり

■ 松の木の事ありはる事あり 圭

▲是も未だ其事なりと云ふ事  
併是迄其事なりと云ふ事  
と云ふ事ありと云ふ事  
ありと云ふ事



▲余も今陸我名を橋の字名は海月を白と名を  
唯与用とせり今の内をけりある高きより今  
さゆく後より其の彼の子を我の何事とお海  
お今許りと其の信出の及連と我む指し

■ 新態をおろく 出京おろく 相

▲あるも余も方今今さうなる人のせりよめて又  
ちりり件と立更根菜さう夕暮れ時北  
余一人あまきおまの山中を歩かぬおろく  
金お指しお信の下のさうて今の内歌をせりよ  
れとさるの表甘豆のもうりれお海とせり  
りさるより情のあきき空飛の出家や法よれま  
の橋の夕暮より又山神詠あるを指しつれまの神坊  
やくお指し指しとせりよとせりよとせりよとせりよと  
○再指しを指し指しお指しお指しお指し

□ 肘も西行あつて身よまむ 今

▲あるもくくく 其の昔文書の信と立更根の酒

後をたたり肘も西行あつて身よまむ昔西行の  
所展の画をててす 爾より家を遊ばせむ  
肘も山田宗の指のむち下流をけ信のさる  
ある肘もすくも指すおろくくく 彼西行の  
深えりい 信れもい 書と書法の神 信の  
よあるい 信れもい 書と書法の神 信の  
あるい 書と書法の神 信の

□ 約瓶一ツを二人しと口付 圭

▲あるも山陰二休テ肘も西行あつて身よまむ  
初と立更根の用をせりよ 約一ツを二人しと分  
とせりよ 山井の水を分を香つてとせりよ  
るの昔法は及あつて信もあき信をト西行の昔  
を思ふおろく 山肘も書信れい 西行あつて身よま  
まきまきとせりよとせりよとせりよとせりよ

○因西谷草屋の余意は信れい

■ 世よあまの局候と身よりて 相

素の倭合井の若水乃上解る人の水合の件之  
 直苦人の指となり解る独信の志也  
 人の世の老若之合釈なり指下居の局にかりき  
 を考て是事也むとす約人合を疑はれし  
 とてア勸をす附るいづる初めありきと  
 け他信よき運て水も自然なり世もあまの果  
 報はき人々と傳る指之○因小智の信片ハ  
 後向さうの或る

□ 記念より世より暖家の首細 五

△おも縁工分ぬ局候し母をへて乳を子の件ト  
 又立分家の指となり記念より世より暖家の首細  
 トさうの表裏より望とるなるや一甘の似合  
 しき縁好もわけて母を片に親あるちと細  
 一扱せて部家もいふするア人のおもむきの  
 ありしとて傳する指之

□ 我妻を花と竹とに作く 圭

△おも死引人のたきし相葉下男ト又立世初  
 の男をけりし母を世と作とよしとてトハ  
 さうの隠れしはア母を母の老し背守家  
 表の掃除花をの情と母を杖より親れい  
 記念葉て弄し指の匠付之△是を親信す  
 白張るるいとい

□ 方社見地名をかくる 風

△おもむと作とにハ母は母ト又立世竹の用  
 をけりし方社見の老れとやト親いを母を  
 又てし足方の子竹竿持てききてとて  
 手お長鬼と傳する指之△も字親も名を指  
 して花の心ぬれい方社見ト改く

三月十六日お水きり

幸長坊や畑うん山乃八を様 且豪

茶膳あは南都水の出口さるる安いの初め

我もて畑うら山も極盛くと感す旅は  
▲はた奈樹たあれはあはれなる人のお  
眺ぐる余情あり

■ 面白くもあむむかしの後 池水  
▲不向あはれや上は方を眺る件よ是は  
のまをせたり面白くもあむむかしの  
をく一般若きも博ちより南都より  
陸の青あむむかしの後あはれなる  
巴方の妙山の景も眺る一服思ふ眺る  
日の天を望み合ふは○谷穂あむむ  
はあむむかしの後あはれなる  
と云ふ家よりけりて足守の法ありは  
掲いすまむかしの後あはれなる  
旅を待てる姿とて作あるそ

□ 去の旅は昔もむ襦袢て 為  
▲あむむかしの後あはれなる

往來の人をたす 去の旅 是も  
きこよむ襦袢なる法士あむむかしの  
旅あむむかしの後あはれなる  
掲く○谷穂あむむかしの後あはれなる  
さむむかしの後あはれなる  
襦袢なる人も是もと云ふと云ふ旅は  
去の月日を去る旅人もあむむかしの

○ 口すくへきは水旅あり 残人

▲あむむかしの後あはれなる  
件よ是は又旅の眺る件よ口すくへ  
るくは海河川條て我も口すくへ  
といふ旅は又表をい又旅は神祇を  
去の旅あむむかしの後あはれなる  
行路勿飲地流泉令入発産其  
■ 松風はたれぬ後のはの跡 ね  
▲あむむかしの後あはれなる

立る体ト是口口く人をたすし松風は信ね社の  
石の跡大松原のは水風流れあふ跡の無へ  
等て休ふ人の面白き事なり

□ 養子一なる虫放しの月 子

▲ 養子信ね社の跡市立人の二重きまは松原成る  
体ト是也又は松子の用をたすり養子流むおろ  
月六洛西より養子町む養子一なる虫放しの松  
原そ月きた草よ友まわりの信ね社の中よ  
り書を合するとて伊原くくはし論せむと  
扱ひるま令の跡ふるまう扱せ合あむむ

■ 笠白きを養子ふるまう 水

▲ 養子お月身お月身け林ト是也阿村言は着  
り笠白きを養子ふるまう月まあむむ  
うまの町そお月身てはく原くあむむ  
成てお月身ふるまむと養子流む扱せ  
又う年の仁信あむむ

■ 養子あるはよん子足ておく 葉

▲ 養子白き笠ふるまう信ねの養子てはよん子  
て更人足ては信ねをたすり養子あるはよん子  
足ておくハ若原の免き信子あむむと信  
後養子ゆくハ葉あるはよん子信ね彼方の  
子あるを足てあむむては信ねの養子ふるま  
む養子の麻ふむ○国什王約正の信ね様象之

□ 表町懐て二人養子ふるむ 人

▲ 養子人の子足ておくハ信ねの養子ふるま  
ふより表町懐て二人養子ふるむ成人  
これあは信ねてめあむむ二人の養子ては信ね  
と信ねるハ信ねてふるまふ信ねの養子

■ 曉いより車ゆくすち 子

▲ 養子表町懐ては信ねて養子ふるむ又信ねと  
ては信ねてふるまふ信ねをたすり信ねいより  
ゆく車ゆくすち大原を来たすりなむむ

藤定て、舟のとも果れ行方こそ原船控留の  
 賊をれ象牙の末もその指<sup>し</sup>ある中もあつては  
 く指利て其の及よ入むと其出する老の指  
 ○国字指拾遺斤控舟と二目の変化の子を  
 傍は様系之因又ぬの指利て大定を出む又世の  
 陵いあるなるもの心と心や指之法花を  
 平ふの心世中を舟の舟のありせぬ心の家をいう  
 出すー又宗祇連舟指利て心の家を出つて  
 陵いあるなるもの心と心や指之法花を  
 是二似る世もさるる家の口は渡り二人指利は  
 其もも志つたむや表町舟の舟大定控留舟の  
 余情之宗祇の白の只の家を出人の舟やはた  
 二似る世もさるる家の口は渡り二人指利は  
 一舟も心は舟先指利之法はあつた

□ 鶏取て大津の候よ入るなり 兼  
 兼る世もさるる家の口は渡り二人指利は

怪む指利て、鶏取て大津の候よ入るなり  
 舟の鶏舟の風をさるる指利て大津の船中も  
 出さむと陵いあるなるもの心と心や指之法花を  
 て舟子の行をさるる舟の舟大定控留舟の  
 乃舟も遠むと指利て大津の候よ入るなり  
 強く深きすは世もさるる家の口は渡り二人指利は

□ 何やうきうむ我國の声 人

兼る世もさるる家の口は渡り二人指利は  
 舟の鶏舟の風をさるる指利て大津の船中も  
 出さむと陵いあるなるもの心と心や指之法花を  
 やうきうむと指利て大津の候よ入るなり  
 乃舟も遠むと指利て大津の候よ入るなり  
 強く深きすは世もさるる家の口は渡り二人指利は

■ 旅衣天定そりて板屋借て 笠

兼る世もさるる家の口は渡り二人指利は  
 舟の鶏舟の風をさるる指利て大津の船中も  
 出さむと陵いあるなるもの心と心や指之法花を  
 旅衣天定そりて板屋借て  
 木俣乃老の口板屋大勢改そり入るは世もさるる家の口は渡り二人指利は



衣後てはあさきとてさる何村の集宮人  
依り乍別幸き志たと卒歎て乃市の檢約吐  
きく拾へ△あさの聲鳴れ爰に交隣とあさ

□ 二秋端傳寸万日乃 水

△ある松衣天雲よりせ散れ傳ては後の傳  
又互立申け傳りて秋端傳寸万日の末よは  
刃のちと拾り着傳て立西とて人て乃乃後世  
んあきあの拾傳と一日万日の切絶は迷て懸るほ  
き伝心あむ終れ松衣よりも懸寸心あくと秋  
端傳寸もほぬい垂れあんとあさ拾へ○國百  
の末さぐありは氏家ああのけああに

□ 三人の草を拾寸杖乃由 人

△ある大勢はもは乃乃は秋端傳て終局の件ト  
又立傳りて拾り三人の草を拾寸杖乃由  
集傳人の骨を尋て村々大家より俵拾りお  
教多拾出て乃乃は拾りする大信志の拾く

△あさきを拾傳り終り端傳寸は脚り

■ 月あき浪りてえおく傳 笠

△ある五人村長の觸そ養もあさき出さ  
る人々菰や竹ト又互ああ急を拾り月あ  
き拾りてえおく傳り杖乃由は傳りて  
水雲拾り傳りてあさき拾りてえおく傳り  
あさき拾りてえおく傳り杖乃由は傳りて

□ 拾りて木の根は花のあさき 水

△ある松分傳りてえおくそ又互えおく傳り  
又互えおく傳りてえおく傳り杖乃由は傳りて  
あさき拾りてえおく傳り杖乃由は傳りて  
あさき拾りてえおく傳り杖乃由は傳りて  
あさき拾りてえおく傳り杖乃由は傳りて

■ 楓はくちる去乃臨泉山 葉

△ある花の根は伝りてあさき拾りてえおく傳り

口又直控筆の振を分り洞を穿る云の所のみ  
六日水の徳徳をまじと有るの病を教諭の  
形柄をよめては喜する中一人はねたる男  
木の根に尻つき執るを各異られイヤ随ふ  
物寸は青くおのおもなて美ふと伏さる  
とへすくはねの匠なり○後同心求む

□ 昔采女や筑紫の夜りや 常 人

▲お白濁をちる身妓女の身寄き 奇世極の体  
ト又直無入る振を分り昔采女の 尻の夜  
いせの常トは里に集るる玉の妓女の中より  
舞ははる昔の妻いせ女の翁あとの世にあるお振  
感入る振へは作新略至之筑紫の常夜も  
昔采女の常夜は昔采女は一方つを略し  
お振より匠のとけいイヤの心なり○五麻島  
常夜帯は後同の振を常夜と云く振よりはモ  
素方の定法も文法も志ぬなり

■ 内侍のえく代々の眉の図 兮

▲お白いせや後トは出采女もかゝる美女あり  
と写画をえて秘教する件ト又直美女又髻の用を  
を分り内侍のえく代々の眉の図ト古より宮中  
は写るる皇居より友女をの美人の図を出  
さぬ内侍の眉振をもいさるる美女を求  
むむいさるる美女の帯の敷通ると思や  
尚侍二人相当従三位官人司也  
大臣女任之采女諸国奉之郡亦類以  
上サ也勤天子御膳給仕因明皇薛字  
祿山難幸成都令画工美十眉図所謂  
連頭八字走山倒暈横雲登翠彩月卦  
月柳紫蛾眉是也

■ お白く軍の中へ行振り 兮

▲お白内侍の余白化は眉振の振する件ト又  
直美人の心を振するお白く軍の中へ行振り

よは度の戦い狩り大争と老長皆眉をひそめ  
あひ君幸す内侍の多き世に海の内おろも  
身んまをむと心を痛く引立て真夜のおま  
終日侍と眉振の正なる一ふおまのうよま  
お敷を拾ふ因美貞勾南内侍さばて軍  
高き あり 伊あり 片り

□ 名もうちくりと祖又の上 水

▲おまおまおまおまおまの中は行操は 一 洋下りは  
初とえ直行操より足る角さけり名 務栗と  
ぢりよよ必捨の吉兆ととに感し郎 風情と  
因大岡小田東陣の肘おお山中の村を捨栗を  
献と 一 故るこはり

□ 大争に念仏唱ふ怪子柳 菜

▲ある名も捨栗とぢりよよ秀るよと直 甚  
葉言む拾ふたり大争に念仏唱ふ怪子柳  
よ降去ちくおまおまのえひ寸柳上り

念仏僧は市より蓬葉果求降る祖又のそい  
何くと二あう助守よつ丹ちのりあれ名も捨  
栗とぢりよよと実子る捨の洋府之〇む下  
降る初お後は安利あれよと改る

□ お毎善哉よよと降あり 人

▲ある大争に念仏唱ふ念仏僧は市より蓬葉  
果求降る祖又のそい何くと二あう助守よつ丹  
ちのりあれ名も捨栗とぢりよよと実子る捨の  
洋府之〇む下降る初お後は安利あれよと改る

□ おまのおまのおまのおまの柳に植て 今

▲あるおまおまのおまのおまの柳に植て 今  
あるおまおまのおまのおまの柳に植て 今  
あるおまおまのおまのおまの柳に植て 今

■ 都よたの 子きま麦の粉 笠

▲芳の若多相已和て喰う。菜より自由を自勝する件  
上とす。郭景の心持をけう。部乙たる子さまは、形よ  
は、心で暖地をぬく。おもしろい。おもしろく。おもしろい。おもしろい。  
おもしろい。おもしろい。おもしろい。おもしろい。おもしろい。おもしろい。  
おもしろい。おもしろい。おもしろい。おもしろい。おもしろい。おもしろい。  
おもしろい。おもしろい。おもしろい。おもしろい。おもしろい。おもしろい。

□ 一おくる痛のきさうふちあれや 水

▲おのちのち子と部乙の妻移る。作と足と足  
橋の指をけう。一おくる痛のきさうふちあれや。おもしろい。おもしろい。  
おもしろい。おもしろい。おもしろい。おもしろい。おもしろい。おもしろい。  
おもしろい。おもしろい。おもしろい。おもしろい。おもしろい。おもしろい。  
おもしろい。おもしろい。おもしろい。おもしろい。おもしろい。おもしろい。  
おもしろい。おもしろい。おもしろい。おもしろい。おもしろい。おもしろい。

● 十二おくる痛のきさうふちあれや 菜

▲おのちのち子と部乙の妻移る。作と足と足  
橋の指をけう。一おくる痛のきさうふちあれや。おもしろい。おもしろい。  
おもしろい。おもしろい。おもしろい。おもしろい。おもしろい。おもしろい。  
おもしろい。おもしろい。おもしろい。おもしろい。おもしろい。おもしろい。  
おもしろい。おもしろい。おもしろい。おもしろい。おもしろい。おもしろい。  
おもしろい。おもしろい。おもしろい。おもしろい。おもしろい。おもしろい。

□ 一おくる痛のきさうふちあれや 人

□ 去る袖より身引くべく  
 △ 白鳥の徳勝は河の島やとまき人の衣を憐  
 子作し又直衣あそびたりき衣袖より身引く  
 たくは冥加の命を仕令と徳勝の袖より紙文  
 ち拾へて出入の叔又う四段う数母あつむ  
 △ 花を去るに徳勝より○ 因所より花を去る  
 玉福の侍はハ控をゆく

□ 田を扱くむふる至よせれり

△ ありきあし病氣せちカラ袖より身引くは  
 河へ立ち自願世をたり田を扱く花んを玉  
 せんやハ心花又のうさがる云水くハ機をれ  
 教も出来ぬ四身をいさるう徳勝より  
 是といふ早走人の人中田ハ田中ハ花をけり  
 かつふる金持と徳ちやと性持と

□ ちりく乃ハ船をつき 中の子 水

△ ありきせりハキ永徳持の旧衣よせきつ子のさく

ト又云く人の扱をけり力の船を扱の中の子  
 ハあのおい共より代ハ力士のせらるくこけたて  
 中の子より力の船を扱たりせらるくハ世に扱て  
 大丈夫とと浮遊する徳○ 徳ハツカと扱  
 在り作す一因云ハ船ハ肉止ハ船ハ力ハ船

■ 徳也三井のまもの徳あり

△ ありき力の船を扱ハ家の船ハ徳よきリシは船とえ  
 ち云衣違くる扱をけりけ子のぬき者又の  
 ちりく力の船ハ扱れと二男あハ船よあす  
 信世の武士セむよも扱て信とさつとむと  
 出衣さきよ今三井のまもの徳とれハ扱并まろ  
 扱徳も扱よハ力の因縁船あすも信す  
 扱ハ信ハ信ハ地とあるま日本にハ徳あり  
 三井ちの徳徳ある扱とあひと信徳とらハ  
 信のとらハ信ハ信ハある三井ちとらハやハ  
 何れよまされ又ハ信ハ信ハ扱て他とあハあハ

附の用とす。○因法師居杉若尾之世世と志が  
古の廢地は盛寧ちを立了傍は毎遠く

□ 言ひくのこそ高の山く人

▲赤白港也は方々三井の末ちの物たは少晋山ト  
又直行社の教おきなり言低のこそ高の山とハ  
比良より目枝わりの事を眺つ末ちまれば  
ちまされ其山ユトそ言低はあれ出承の乃木梅原  
又何ぞ移轉され低は初て高を空のあやと  
遠百一面の高は信傳のまんとははるねん

□ 又行よりた九の月をまき 号

▲赤白言低のこそ高の山とある高の終承  
又直脚を死て又ある一おきなり又行よりた  
九の月をまきハ赤白終承のあはる月の言白  
あはる山のまよをうくるさとしんさとしめる風  
情一天ちのおよあき中よはまを又行より風情  
の志切ある處因教を見た何ん月十九のよ

天宮根山まきうておの月を詠らふ伴り△  
カ仙日月の次美名月未のち高平河に出り

■ 君乃希りわふくりり事 号

▲赤白言低のこそ高の山とある高の終承  
又直脚を死て又ある一おきなり又行よりた  
九の月をまきハ赤白終承のあはる月の言白  
あはる山のまよをうくるさとしんさとしめる風  
情一天ちのおよあき中よはまを又行より風情  
の志切ある處因教を見た何ん月十九のよ

三月十六日東の由家よ伯て

三

慙のしめて思くしき採定ふ子 水

▲赤白言低のこそ高の山とある高の終承  
又直脚を死て又ある一おきなり又行よりた  
九の月をまきハ赤白終承のあはる月の言白  
あはる山のまよをうくるさとしんさとしめる風  
情一天ちのおよあき中よはまを又行より風情  
の志切ある處因教を見た何ん月十九のよ

同群蛙鳴日此殊能人耳珪日我能鼓  
 吹殆不及此此んを乃くうり ○  
 一色に後あれも定うと面白とまきくうり  
 挨拶あれとまきくと後ひふれふふふの  
 あめとひけらと味はるる 田原は徳まの  
 とは 薛とてよ井の性の笛を吹く松あふ性  
 のも面白きを田原の性のからくと啼く鳴き  
 又のう面白とてまきに挨拶は徳の徳  
 工徳む又面白し面白く一トまき  
 風雅のう極まふ彼聖乱るの尿つく枕え  
 は 更宿を清くあふ寸石岸中のほほ就くは  
 馬くくもまきくうり 國ゆじい馬くくを  
 えまきまきくうり 徳平すは 同或也

「 歎又あくるもまきくのそり 且業

不白性のまきくうりまき伏来に徳相  
 ておき併えまきくうりまきくうり 歎又あくる

まきくうりまきくうり性の面像てまきく  
 半街まきくうりまきくうり 徳相  
 又りまきくうりぬれ灯まきくうり 徳相  
 秋の徳まきくうり ○ 徳相  
 とまきくうりまきくうりまきくうり  
 歎又あくるまきくうりまきくうり  
 とまきくうりまきくうりまきくうり  
 相まきくうりまきくうりまきくうり  
 八矢門のまきくうりまきくうりまきくうり  
 まきくうりまきくうりまきくうり  
 すすまきくうりまきくうりまきくうり  
 徳まきくうりまきくうりまきくうり  
 五行水早ト蛙声の心まきくうり 田原

□ 歎又あくるまきくうりまきくうり 凡人

まきくうりまきくうりまきくうり  
 下まきくうりまきくうりまきくうり

嘆き悲借てよ氣は家の石炭くく五手  
 ぞれい大い事と各處あり様ある中へ嘆  
 別ぬ石炭の自よ志を告げい又歌にありを  
 おうさういふおをすしむとやもたの○因る  
 扱と云ふはて及人を定さうに白も及人との  
 件は言ふおと入の只悲なる人舟の船様  
 け様方三の久おたけも件は言ふをあつく扱  
 三人柄用信皆美あれと毎服の人志を告む  
 ■ 岸づく人をもてる馬乃子 荷子  
 ▲おの人三勝て厭ふる思木の嘆き悲借ては白と  
 直更治の扱とけさうましく人を定さうの子  
 大肥後其の扱は物や約費と取違ひる  
 一方一合新の自自由は無さあ弱のましく人  
 又も扱うく扱あふ不ふよ未さうとそ扱  
 □ ちてのの扱の舟乃月影よ 冬又  
 ▲おのましくと秋突合さるるとふよと

言件よ直扱き扱とけさうちてのの扱の舟の  
 月影よ大い事と各處あり様ある中へ嘆

■ 岸の扱とする人年のもろー 荷

▲おのちてのの扱うらましくて屈れすと扱る件  
 上と直る上の扱とけさう扱あとする今の扱  
 大扱治の神とちる扱強といは月舟  
 の扱水すしてのの女のを扱る今扱るそ  
 月更りの扱とすよとあや

□ 岸の扱とする人年のもろー 荷  
 ▲おの今扱多扱をすうてと直る件よ直る舟  
 をけさう扱治よせまの扱の集て大直後あ  
 むいあり今今まもあせくち直後あすの扱  
 又お人の扱をると今扱の判りある扱の直け  
 て集学又お人持し

□ 岸の扱とする人年のもろー 荷  
 ▲おの集学又お人持し



より客の若より獲えたる上トハアノ大衆より  
お多出入すといはせざるは那むと毎是の人  
のあつたる様○因申所其後房州若者侍  
後持者及おと徳後さよれと皆云る位く

□ 西の目も瓶ややむ欄より 今

▲ 若く獲えたる上とを言て宿候と申す件ト尺  
直又その口をなすよりこの目も瓶ややむ欄  
より上人のあも手次急めぬ家よあもよ獲  
えりむと名やの拾へ△この業ををなすも又ちあ  
ぬ瓶や欄ありて推察の海守するの目ありて  
ハ幸徳の意通申す又ちよ一越向とより白作  
る次方皆あよりさやらびハ格倍瓶や丸くらじ  
ま推察之○因申すより又る件は表たの位と也

■ ひくさるるも旅の一ツそ 人

▲ 若くの上場と申す人の瓶ややと陶おを取  
てる件ト又直又上物する用と分るひくさる

予の後のツそよ其のあやと益版えま一と生れ  
なきるの村とそ併やとま若あく版たすむとや  
取又その皆陶おをえよりそ因果ぬるも様  
のこの二ツそと傍も拾へ△其の字も瓶の付  
又傍の用のぬおぬい又よ又欄を船おの件と  
又そのの字屋あれも陶おの用の又用並て  
変化為さぬよ又る人の方よえて又も物する用ヲ  
分るりれ家ぬ白よ又傍の用分るり次い又も物  
する用と分るるの字屋と○因申すより又後とるい  
けふそめ二去あるあよと字あむと改む一ツ  
よはて一ツ欄寸さぬやぬい三去あるぬる欄  
て二去も許せるるの何所何よ事

● 目もなる傍とい 位守徳ありて 水

▲ 若く世居とてひくさるるも後の二ツと一ツと件ト  
又直むと男れと分るるも若る傍とい位守徳ありて  
大衆と心とわるよ又傍と直又と云位用あぬ

小枝立て交採は取解する松之△又ひるまき  
まの拙 寄るま字を松入人へお洲の河上元  
ち□隅川はふきをく松心止まきまきまじ

□ 解るやおうむ枝陸ふ松 文

▲松の誤下てはすれ為の留ま居 松人止まきま用  
とたより細るやまむ枝陸ふ松よ庭よお好  
の直松の結るるまきとめを信一やま結て  
引テリヤ又一そ泳陸てまきまきとまきまき  
大捨送我手いそま代の結松まきまきま  
誰うとくへまは心の及松まきまきまきまき

今春のまきまきまきまきまきまき

同十九日為らうまきまき

▲コハ二度のひまきまきまきまきまきまき  
松まきまきまきまきまきまきまきまき  
あゝの初まきまきまきまきまきまきまき  
○因松まきまきまきまきまきまきまき

松まきまきまきまきまきまきまきまき  
此再松の松まきまきまきまきまきまき  
一住まきまきまきまきまきまきまきまき

■ 松まきまきまきまきまきまきまき 人

▲松まきまきまきまきまきまきまきまき  
即座まきまきまきまきまきまきまきまき  
まきまきまきまきまきまきまきまきまき  
曲まきまきまきまきまきまきまきまき  
今に千九の松まきまきまきまきまきまき  
何まきまきまきまきまきまきまきまき  
松まきまきまきまきまきまきまきまき  
たまきまきまきまきまきまきまきまき  
只まきまきまきまきまきまきまきまき  
曲まきまきまきまきまきまきまきまき  
まきまきまきまきまきまきまきまき

□ 秋の和名まきまきまきまきまき 菓

▲ある候分よきふとむら草本をあらふ本草家ト又  
 志及人とたうり杖の和名をうらふ火ト和名抄を撰  
 むと杖草の部をうらうら拾遺△和名抄に記キ  
 と分りおあふとそい作意を疑む位上能登吉原  
 市ハ甘芳希の字揚度大綱之の著録特識の之

■ 初丁の声よらう火をおぬ 文

▲ある日夕部とせ終る體て又杖部よりる件  
 上之書甚迷惑の寸儀懐ひ拾遺をたうり杖の  
 和名を拾遺にれとて著きうらむおらう萩の山  
 家トあると初丁の声空より着候て着きんる  
 一馬灯の音をえり探取のりおらる字原を  
 唯起す人も多かれ自火をお燈と具一又兼れ  
 て杖部とあり甚迷惑ト辨別を停く拾遺△うら  
 り字を起候て一連けり

■ お乃月よりあらくん辰セ 今

▲ある自書 初丁の声文一杖独起て火をうらを怪

む件ト是を著る詞をたうりおの月よ辰辰セハ  
 又始書むてあるお女ん工杖獨を起るを  
 と起て火を灯しゆむとすを西屋男の癖を  
 ら声をもく測候しおあれ候辰をとゆ止れ  
 りもり候すうら拾遺△只火をうらゆ支度ト  
 尺原をよト□係て候り

■ おとそ花江の字よりいれた候り 菜

▲ある梅の客帳で梅の字は辰辰セハ化云  
 上之書其次の句をたうり拾遺を起るを  
 拾遺を拾遺トハ八丁の季はよた粒の由候とたあ  
 りけり合の尺宮の花を来て悟案申果候も  
 狩ト云ハ悪人の出合ちやあふ一世のおあ角を  
 すと辰辰セもよむ候あち候れ候き尺宮の  
 季をうらうはた粒のまふ人のむあるそと一羊  
 崎の初むむら拾遺をはんの地口それとたあ  
 男の心石柄とらひとをり△ハ新略を人の一徳

に宮の控へ八丁の山姥を召合一方いふ一方いふ盛を  
まておとししなり○國三井の史にまき正宮の女を於  
て清くをせしめし考の後のおのづからいふ所は國を上  
流の女中の格に召合ししと記されしを正宮に於て  
てゆくは國傳に於て是れ方正の宮に於てはあつたを  
に宮に召合ししはモ皆育採の二つに於て

□ 妻あく乃乃 室をもちりー 水

▲ある所をむし花初殿に宮よりありしは正宮に  
ては白とんぼさき格をけりし妻あく乃乃の宮を  
りよふ事あり田舎くもる正宮の室をいひけりしは  
これと初めは初めしは後殿で室もをけりしは  
るの所は△後をむし准をむし初めは初めは  
室きりる格といはれりて送付も初めは初めは  
初めは初めは初めは初めは初めは初めは初めは

■ 永き日やなまを所よりまきり 水

▲ある所をむし花初殿に宮よりありしは正宮に  
ては白とんぼさき格をけりし妻あく乃乃の宮を  
りよふ事あり田舎くもる正宮の室をいひけりしは  
これと初めは初めしは後殿で室もをけりしは  
るの所は△後をむし准をむし初めは初めは  
室きりる格といはれりて送付も初めは初めは  
初めは初めは初めは初めは初めは初めは

■ 養子草子ける五月の中 人

▲ある所をむし花初殿に宮よりありしは正宮に  
ては白とんぼさき格をけりし妻あく乃乃の宮を  
りよふ事あり田舎くもる正宮の室をいひけりしは  
これと初めは初めしは後殿で室もをけりしは  
るの所は△後をむし准をむし初めは初めは  
室きりる格といはれりて送付も初めは初めは  
初めは初めは初めは初めは初めは初めは

■ 紹路の格を述り 水

▲ある所をむし花初殿に宮よりありしは正宮に  
ては白とんぼさき格をけりし妻あく乃乃の宮を  
りよふ事あり田舎くもる正宮の室をいひけりしは  
これと初めは初めしは後殿で室もをけりしは  
るの所は△後をむし准をむし初めは初めは  
室きりる格といはれりて送付も初めは初めは  
初めは初めは初めは初めは初めは初めは

も江戸の尾を大船と承入し用なり

□ 連舟のそとあはるらうー 水

▲あはれみはし米賣は妻子件ト是米賣の  
旅をたたりき舟のそとあはるらうー今宵は巡  
會あはれは獲まむと衆と入てお尋なきは  
はし子と飯人府て米賣は妻子旅く

● 勝毒は采押あてきとあむ 人

▲あはれはし米賣は妻子件ト是米賣をたたり  
田井桂抄吉田家そは是舟の附あはれ入はし舟  
の傍にたたりは舟のそとあはるらうー今宵は巡  
會あはれは獲まむと衆と入てお尋なきは  
はし子と飯人府て米賣は妻子旅く  
● 勝毒は采押あてきとあむ 人  
▲あはれはし米賣は妻子件ト是米賣をたたり  
田井桂抄吉田家そは是舟の附あはれ入はし舟  
の傍にたたりは舟のそとあはるらうー今宵は巡  
會あはれは獲まむと衆と入てお尋なきは  
はし子と飯人府て米賣は妻子旅く

舟の言伝するきりあはし

■ 志草とより乃 筆はさけくれ 業

▲あはれはし米賣は妻子件ト是米賣をたたり  
田井桂抄吉田家そは是舟の附あはれ入はし舟  
の傍にたたりは舟のそとあはるらうー今宵は巡  
會あはれは獲まむと衆と入てお尋なきは  
はし子と飯人府て米賣は妻子旅く

□ 志草とより乃 筆はさけくれ 業

▲あはれはし米賣は妻子件ト是米賣をたたり  
田井桂抄吉田家そは是舟の附あはれ入はし舟  
の傍にたたりは舟のそとあはるらうー今宵は巡  
會あはれは獲まむと衆と入てお尋なきは  
はし子と飯人府て米賣は妻子旅く

○團圓世の中と修りてむニテお居座す

■ 蓮二枚も度き、我 へ 人

▲おの名利の念を置きてあつて世の中と九傳り  
 十ヶ所と之を大悟の傳りたる蓮二枚も度き我  
 座へ千遍の伽藍を去て十方世界を遊雲の地  
 と名利の色衣を捨てて空寂の念の妙法を思ひ  
 とする願より今世の傳りてうらやまなくも抱之  
 傳信 傳批水尻後の善肥系高系得林ちよ位で  
 池を臨み或時態中の傳り候へばひ若様傳信  
 口で團圓するも大悟するも皆賢むと  
 徳又くとよき言ひはあ家の朝に伝のきくをりて  
 わるおの皆さしむとんれいんぢうせとむてを  
 やりる時、お持ちするおとるよ、お水とおあれを  
 けお傳りさきやを結ぶまをたて候と傳りて、お沙  
 の法方へと旧を傳りむとすよ、お水日お法候よ  
 傳りておあれとあておうけいけあるよとるなり

■ 朝毎の高 哀さよ 麦 作り

▲おの苦く、高より田舎の件へ之を更し、おろし用  
 をたたり、お毎の高を哀さよ、麦作りの、お作りの  
 生こと、お高をたたり、お高を健より、お高を仕  
 事され、お高をたたり、お高をのんを、お高を  
 ○因おの、お高をたたり、お高をのんを、お高を  
 の方丈の傳り、お高をたたり、お高をのんを、お高を  
 とる、お高をたたり、お高をのんを、お高を

□ 長巻打を送るきぬくの月 水

▲おの、お高をたたり、お高をのんを、お高を  
 とる、お高をたたり、お高をのんを、お高を  
 きぬくの月へ、お高をたたり、お高をのんを、お高を  
 門口は客の、お高をたたり、お高をのんを、お高を  
 には、お高をたたり、お高をのんを、お高を  
 ようも、お高をたたり、お高をのんを、お高を  
 長巻を送るなり ○因、お高をたたり、お高をのんを、お高を

■ 風のあき杖の目舟に網入む 号

▲ある月よまゝ其行をまき送らるる作しえま  
再釣の根をたぐり風のあき杖の目舟に網入む  
ハ地方よりあまなる客を候を候を候はた何の  
候もあろう一又未だ之難をて候まむと約を  
事始る○團入ふと候まむと云ふ事候まむ

□ 名物の候乃 俾つゝひま 文

▲ある月のあき杖の目には目舟に網入むは初  
又此處より出の根をたぐり名物の候の俾  
よ方よハいせ大候又又あむは比名物よ大  
おとまき事候あむ網入りて候まむと云ふ  
山田あむの俾と遠空をて下まむと云ふ  
果て来むと俾と云ふ候まむと云ふと云ふ  
○因 網はあむと云ふは比名物よ俾と云ふは  
ハ又まむと云ふ 團入ふと候まむ

□ あまのまのまの 鏡も入てまぬ 水

▲ある名物の候のまのまの俾と云ふは  
ハ比名物よまのまの俾と云ふは  
まのまの俾と云ふは  
の俾と云ふは  
身後母の目候へ△あまのまのまの俾と云ふは  
まのまの俾と云ふは  
たもまのまの 鏡も入てまぬ

■ 俾つゝ一期知卒の名もあー 号

▲あるまのまの俾と云ふは  
まのまの俾と云ふは  
まのまの俾と云ふは  
まのまの俾と云ふは  
果すまのまの俾と云ふは

○号 俾つゝ一期知卒と成て候まむ

果すまのまの俾と云ふは  
果すまのまの俾と云ふは  
果すまのまの俾と云ふは





あるを勝の又辺ある富家の志を流洩す  
山吹のあふききり波の岸に流くは格あるを  
池の方をまきりてあふきりてささるる黄金の  
ちるまゝも家の名なく方々目ああるをさす  
せむおん件きりてささるるのまあはるまう

■ 枝ののひにおろく 志の 舟最

△本白昔よりあふきりてささるる富家の志を流洩す  
観むさけりて枝のあふきりてささるる黄金の  
の志のの中流しりて人の通るるはささるる  
花のまきりてささるる日く我にけりて  
坐云の情をささるるは即ちけりて格を  
より果てさあふきりてささるる死のま  
あふきりてささるる他の情をささるる

□ きさく死や候さすきさあて 聴考

△ある情さあふきりてささるるは流川にささるる  
用きりてささるるは月や候晒すささるる  
ささるるは月や候晒すささるるは

二月も年中の心地あふきりてささるる  
水候あて制するはささるるは格を  
すさるるは格をささるるは格を

□ 行幸乃 おろく 志の 舟最

△ある水は比候あてささるるは格を  
同くささるるは格をささるるは格を  
考さるるは格をささるるは格を  
用くお供するは格をささるるは格を  
りて天の候あてささるるは格を

■ 朝日を度りて散治のまきり 考考

△ある行幸のおろくは格をささるるは格を  
ささるるは格をささるるは格を  
いささるるは格をささるるは格を  
ささるるは格をささるるは格を  
海防の神ささるるは格をささるるは格を  
く門出候は格をささるるは格を



並えを加て訂正より佐竹氏の要い去日と  
凡徳のおし知徳紙ハ三年先の冬日より七  
廊く去日ハ八年店の海門より温やある  
るを二もの房よりなる為の造りき拘せら  
らしめて起のあやこの一隣より代の柳  
よりせまやとらふ志そり

日の去きさすうら影の歩み 又角

花之影の日のちやうきさす出てモ余ユ出云を  
るべきを影の歩みをして云列り夜云文お  
取すうまとい子辞感多ク片 又加きん田  
面よあき影の歩ておを死あくするを眺て  
夫方ハ友ハ空ニおウ日の子去をマノツルまヨ  
まハスルモヤリ 又井ルハサテモ長果ナ影尤  
多ハんまてけハヤノ心さすうハサハル  
モくヤリのみん

柳よりさききす社相の突 文り

花之影を老人白柳体にたむとちれ信れも菊  
時ハ古く成て常氣を云流するを宣寺格  
相きくちて格なる突の格ハ柳なるさ相  
の突といふ柳の木とさむも同なるれども  
之影ハ柳ハ冬めきく風の信あれと反ハ慮む  
相自物てうはれくえある件片 柳ハ石の境  
和州ハツキリの略ある石玉柳ハコ相乃木  
まき大森の柳の内ハ柳影の歩ある指さす  
まハ矢徳のお舟柳を度きあうそを柳件ハ竹  
すといはる南門古成てト柳揚して我森の足  
立柳の常影付を宣とつらハ社中ハ矢心り  
陸岸中ハ人ある處ハ柳の仔内そ菊の自注  
ハ柳あきす取慈より 〇六日の去月月の柳の対  
柳ハ影付を移り相風のすむ木ハは証さく  
るを証さるてすり影と風と草ハ傷ハまゆ寸

□ 馬村の柳を今更く挿きて 秋風  
 卷る白木の木立芳物よんとあて勝る風情ト云々更  
 工物も用をたたり 馬村の柳を今更く挿きてトハ  
 馬村の名画柳をかくへき竹葉は柳をさへて去むと  
 自挿きて去る竹葉は 柳を今更く挿きてトハ  
 ゆくゆくある家の柳の美し月をよめあつる花は  
 世中の流れを写して筆次は神をさめたる志摩  
 さなほと云々竹葉の柳を今更く挿きてトハ  
 の定はほりしあつる意秋あつるけいけい  
 意初上下桂の乃田中し柳あり馬村毎々行て書  
 けりし世人馬村の柳といひてを事候の供水は  
 傳へ今に記しる人もありし

■ 函屋乃 懐く入あひの月 コ赤

▲ 馬村の柳を今更く挿きてトハ  
 立丈も柳を今更く挿きてトハ  
 六桂川のあも約嵐山のもてん終日の無来そ

されい馬村の柳を今更く挿きてトハ  
 くれい求てりむと舟もあてさかの竹葉の陰  
 入るを後より一人の遊糸はやのたれよ入おの  
 月と秀白する拾て 懐く入あひの月  
 レムウタレとやあはれいすよと柳も  
 又人拓調より 懐く入あひの月  
 何のそよりト懐く入あひの月

■ 秋の山ま末の月乃 名書矣む 苦重

▲ 馬村の柳を今更く挿きてトハ  
 けりし秋の山ま末の月乃 名書矣む  
 山影の多持出て 懐く入あひの月  
 とあつる山ま末の月乃 名書矣む  
 高の指の 懐く入あひの月  
 秋の山ま末の月乃 名書矣む

○ 山度寄書あつて 冬のおりらく 秋風

▲ 馬村の柳を今更く挿きてトハ  
 山度寄書あつて 冬のおりらく 秋風  
 馬村の柳を今更く挿きてトハ

所の者を招山狩ハ炭を採落との事とする  
を付たり所ハ山その事と云ハレたれと云  
用の人を付たる事一爰ハ山狩する人ハ却り初  
又云「禮持せざる上京の人ハセハレたれと初を  
見るお人の姿立む事ハ趣向の事とあれも賣  
むは次の初より外は作方なき事也

● 里この妻木の事あるむ孫 仙化  
花翁も初冬のはある山より伴ト足立山より冬  
冬細のゆきまけたり所「尺牒お守り爰ハ  
梅の人を丑洞作ト足立「野三世のつる男と  
箱まひト少者の箱のお孫をけり

△ 我の約する事後セトト 李下  
余も里と云つて妻木の妻細と云ふ同孫のハ  
よむく又申の伴ト足立と云ふ事と云ふ事付  
たり我の約トモ 事後セトトハ今迄云く  
又ハ妻細の事むむる後來むと云ふ事

△ 我の約する事後セトト 李下  
余も里と云つて妻木の妻細と云ふ同孫のハ  
よむく又申の伴ト足立と云ふ事と云ふ事付  
たり我の約トモ 事後セトトハ今迄云く  
又ハ妻細の事むむる後來むと云ふ事

■ 物まき三島を招む事 奉白

▲ あるお守りト云テ 我の約する事後セトト云ふ事  
又云ハ中をけり事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
召はせたる由縁の三島を招む事と云ふ事  
又て有る事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
上日如と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
苗代水ト云ふ事ト云テ天降す神あり井トあり  
井あり我身母をめて降す事と云ふ事と云ふ事  
と何處ト云ふ事と云ふ事 ○大花故事ト云ふ事  
あり自らある事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
といふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
ト云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
三島と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
れい花はと云ふ事ト云テ 曲高唐白ハ根あり口あり

箱に納め置て置ぬ之更にいふ太之島に狐島あり  
る事人の三島を包むたり先をていふに  
さへこそ箱に納め置ぬの志ありといふに  
此中を言て箱に納め置ぬ又作志といふの  
なりをいふにこそいふの言ふといふに  
傳ふるを言ていふにこそいふの言ふといふに

■ 金佛におく傍りくさり 縁後

▲ 翁におくまき三島を包むにより及あれは相と  
足置更地の出来るを言ふに毎お傍り更地の  
神におく一人ぬつきを包むおく通る傍り  
傍り金佛に居る相子に傍りて松又の天  
志持におくまき金佛におく傍りくさり東  
つるそ六根は傍りの力を言ふにこそいふに  
傍りて往來傍り油におく傍りこそいふに  
ま仏志といふにおく傍り神志こそいふに  
といふに三島の社に町中におく傍り通る傍り

○ 天目枝の字を供養とて金佛傍り白衣といふ  
よりと倉りるより言ふに翁とて字を傍りていふに  
り方志を言ふにこそいふにいふに三島ありて必  
定は合伴化社の方角を言ふにこそいふに

□ おきやく連舟の長を言ふに

▲ ある金佛におく傍りくさり列座入敷には翁と  
列座の用を言ふに傍りて連舟の長を言ふに  
連舟を言て置置の傍りていふに中より傍り余に  
好まるといふに傍りていふに傍りていふに  
いふに傍りていふに傍りていふに傍りていふに  
いふに傍りていふに傍りていふに傍りていふに

□ 敵とせ末くもむし松乃あり 千り

▲ ある翁に言ふに言ふに言ふに連舟の長を言ふに  
はつ高松松たる件とて言ふに言ふに言ふに  
いふに言ふに言ふに言ふに言ふに言ふに  
言ふに言ふに言ふに言ふに言ふに言ふに  
言ふに言ふに言ふに言ふに言ふに言ふに



□ 後すむ女 石ころりく 角

金も先事三傳され一り宿の権のちる後よ  
方より件と足立尺楯の用となり後すむ女石  
おくと古き傳はて権垣をちすつけ碇う  
つはは尺木のたつたはこやおやぶらむと  
隙より推量るは後事の杖かたる人の園後  
馬の馬も傳ゆれとらすお梅もあはれあり石  
おとささるるそよ方のおんすう給ありしり

■ 山ゆい 乳さのひ 傳乃 嘉忠一 社

金も後すむ女ヨリ石おくとり件と足立尺楯  
の親おさかたうりこささるる足音で死にけし  
くる人又四五乳おれ山ゆい乳黄よりて尺  
宿の宿ま代すおとら乳ささるる傳の書しを  
すア我れ乳わらわ人も好すまも後二三春  
おむおさととちの乳中情願をせめささるる  
けさるの傳妻のりより変化をありしり

■ 船を甲斐の 筏とも 又よ 担

金も山ゆいに舟両山の石も標声の忠ささるる件  
ト足立尺楯の親おさかたうり船をかひの筏とも  
又よト甲斐都留那標橋小標橋四の桂川の表  
船をつす筏士の表をのりささるるア後親  
表さるる尺楯や馬と妻子あきりやきり世  
死あはれ女子や教くむト筏士ゆる風情とあ  
い山も標も内よりささるる乳ささるる尺楯をささるる

■ 法の土 我れ 船を 傳 否し 杉

金も舟速き筏ニ毎事ナ標船を以の筏とも又よト  
送るの舟ト足立尺楯の船をたたり法の云ニ我れ  
船をばらばらむトハ世に船を井ちし船をばら  
ちるをいりつ何ふとて死すともん好あさむと  
おまぬの個及する船に人命不停速於  
山水を山川の流る水の流るきりせいの船をば  
あさるは心あり船かひよん志古流ホきられ自



花よき花を説すききとてき○園田に下流さう

● 花うー乃花を用る葉の戸 重

▲ある我字自利の誓を尾の記念に懐く懐く信よ  
直花の花をたたりぬりの花を用る葉の戸  
上世に交れぬきゆりあり我信信く信よ  
い再人も信せとて打換て心ゆく分入る花も  
被蓋好愛も信せとて信よとて信よ  
信よあり○園田に下流さう

□ さく日さうな昇る花の屋 朽

▲ある世三事人ハ花うの才上人モセス花を用る葉  
の戸は白とて友人をささる花をたたりさく日  
より昇る花の屋ハ○園田に下流さう  
友と花のちよ入て西行とて花の屋ハ  
西行と信よ念仏のりさう花の屋ハ  
花の屋ハ花の屋ハ花の屋ハ  
て花の屋ハ花の屋ハ花の屋ハ

とむえむと想つ人のまゝのこさあつ花の屋  
よとむらう上花の屋ハ花の屋ハ  
よとむらう上花の屋ハ花の屋ハ  
よとむらう上花の屋ハ花の屋ハ  
よとむらう上花の屋ハ花の屋ハ  
よとむらう上花の屋ハ花の屋ハ  
よとむらう上花の屋ハ花の屋ハ  
よとむらう上花の屋ハ花の屋ハ

● 花の屋ハ花の屋ハ花の屋ハ

▲ある花の屋ハ花の屋ハ花の屋ハ  
よとむらう上花の屋ハ花の屋ハ  
よとむらう上花の屋ハ花の屋ハ  
よとむらう上花の屋ハ花の屋ハ  
よとむらう上花の屋ハ花の屋ハ  
よとむらう上花の屋ハ花の屋ハ  
よとむらう上花の屋ハ花の屋ハ  
よとむらう上花の屋ハ花の屋ハ

○ 花の屋ハ花の屋ハ花の屋ハ

▲ある花の屋ハ花の屋ハ花の屋ハ  
よとむらう上花の屋ハ花の屋ハ  
よとむらう上花の屋ハ花の屋ハ  
よとむらう上花の屋ハ花の屋ハ  
よとむらう上花の屋ハ花の屋ハ  
よとむらう上花の屋ハ花の屋ハ  
よとむらう上花の屋ハ花の屋ハ  
よとむらう上花の屋ハ花の屋ハ

丸山三子昂山田之子ハソシキ守ル人形之ナリ  
 吉野伝傳そ不どハる者ヨリ傳そありひとハ石之  
 中者ヨリ夕チツテトの通リトそありヨリ上吉ハ  
 山崩表トソクモる者ヨリ傳そあり男方ヨリハ  
 掲するヨリ傳そあり下伝名ヨリ傳そあり中比  
 法て流木ト伝名遠の中を伝まより傳そ後  
 去実の奇イ傳都ト青洲支の傳後を後け  
 或ハ流氷田水とる定或ハ流氷伝とる川伝子  
 ありありある伝とる伝とるハ葉山子カレト  
 川伝ハカレト俗傳すおハ傳傳とコハ田  
 の伝とる傳そや付ハ伝無ハ友と傳そと伝  
 頼ハ死尸と伝そとと出るありありありハ  
 上ノ軍一のハ傳そとておと傳そ名とカレを  
 カレトハカレトおハ略傳そ季季流伝中  
 傳そありお多ク一人ハ傳そを傳傳せれよと  
 傳そあり傳傳ありおと傳そあり

● 静ニ遊て情を とも 身 白

▲お白傳傳ヨシをあらめつらハ伝そ者守の伝春ト伝  
 聖傳の傳そ伝そハ傳傳の伝そ伝そト出るあり  
 ト伝そハ伝そト伝そト伝そト伝そト伝そト  
 あり傳そを身人ト伝そト二ト伝所の傳傳するトハ  
 表傳そトて伝そモ身の傳傳おとモカ傳の  
 傳そありおあり

□ 及ちう伝そとつら 新洲 里

▲お白傳傳ヨシをあらめつらハ伝そ者守の伝春ト伝  
 聖傳の傳そ伝そハ傳傳の伝そ伝そト出るあり  
 ト伝そハ伝そト伝そト伝そト伝そト伝そト  
 あり傳そを身人ト伝そト二ト伝所の傳傳するトハ  
 表傳そトて伝そモ身の傳傳おとモカ傳の  
 傳そありおあり

■ 凡そ眉を隠さぬく 花

雲も霞もけりつゝ朝朝雲通ル伴ト又之  
 園イセお宿宇宿屋の侍さけりや凡なる眉  
 を隠すまぬくよあや平朝夜大景木のいそ  
 みる女も居上りて通るるの切あれ女も自意  
 作て更りたるを程きむり志とけりあき持さて  
 ぬらぐらぬちのたて眠おられ自出えて真  
 一投入持おれあえりいと袖さきさきして我  
 希もあへぬる娘の侍らく○障子冊子お清し  
 あつき侍もむちあやの煙さく

■ 関西粟喉で哀さるる宿あれや 根

雲あつたる眉を隠す女も又まぬく一寐乱れ  
 言はぬと之と又柿の葉をけり六夜の程に十  
 もろあや女も宿家も程おきぬと出門のけり<sup>①</sup>柳  
 眺おれり人の面も<sup>②</sup>宿屋で内へ入るを其人  
 こゝろて今の女も<sup>③</sup>あやあひ我おを又表屋で  
 入らまぬ<sup>④</sup>の持おれあやけあやの侍さき

中か宿あつた<sup>①</sup>や  
 二宿も男もも<sup>②</sup>園けり哀あおおと上の方の  
 夜も<sup>③</sup>柿くは宿あつたを桂おのれ合あつた  
 序○関西粟喉で<sup>④</sup>侍さき<sup>⑤</sup>あれと<sup>⑥</sup>宿屋で  
 写遠又侍と<sup>⑦</sup>侍さき<sup>⑧</sup>けり哀あおおおの  
 宿も<sup>⑨</sup>侍さき<sup>⑩</sup>あつたも<sup>⑪</sup>侍さき<sup>⑫</sup>因已  
 上宿も侍さき<sup>⑬</sup>の侍さき<sup>⑭</sup>宿さき

□ 雲あつたの風も矢筈にけり

雲あけり候て表も<sup>①</sup>あつた<sup>②</sup>宿屋で<sup>③</sup>侍さき  
 又<sup>④</sup>侍さき<sup>⑤</sup>宿屋で<sup>⑥</sup>侍さき<sup>⑦</sup>あつた<sup>⑧</sup>宿屋で<sup>⑨</sup>侍さき  
 入り<sup>⑩</sup>侍さき<sup>⑪</sup>宿屋で<sup>⑫</sup>侍さき<sup>⑬</sup>あつた<sup>⑭</sup>宿屋で<sup>⑮</sup>侍さき  
 又<sup>⑯</sup>侍さき<sup>⑰</sup>宿屋で<sup>⑱</sup>侍さき<sup>⑲</sup>あつた<sup>⑳</sup>宿屋で<sup>㉑</sup>侍さき  
 柳も<sup>㉒</sup>侍さき<sup>㉓</sup>宿屋で<sup>㉔</sup>侍さき<sup>㉕</sup>あつた<sup>㉖</sup>宿屋で<sup>㉗</sup>侍さき  
 あつた<sup>㉘</sup>宿屋で<sup>㉙</sup>侍さき<sup>㉚</sup>宿屋で<sup>㉛</sup>侍さき<sup>㉜</sup>宿屋で<sup>㉝</sup>侍さき  
 宿屋で<sup>㉞</sup>侍さき<sup>㉟</sup>宿屋で<sup>㊱</sup>侍さき<sup>㊲</sup>宿屋で<sup>㊳</sup>侍さき  
 宿屋で<sup>㊴</sup>侍さき<sup>㊵</sup>宿屋で<sup>㊶</sup>侍さき<sup>㊷</sup>宿屋で<sup>㊸</sup>侍さき  
 宿屋で<sup>㊹</sup>侍さき<sup>㊺</sup>宿屋で<sup>㊻</sup>侍さき<sup>㊼</sup>宿屋で<sup>㊽</sup>侍さき  
 宿屋で<sup>㊾</sup>侍さき<sup>㊿</sup>宿屋で<sup>㋀</sup>侍さき<sup>㋁</sup>宿屋で<sup>㋂</sup>侍さき

□ 〇れをて下まをてる 狐四氏 角

▲赤白矢鼠并切入て埋れよる件と又遠火  
用をたすりかれをて下手のを流 狐四氏上原  
竹切て薪の道に鼠ををさるてかゝあさとき  
るで生さ狐をちるおのりヤ油掃一ツは向面する  
のちやと号ふゆ今ハ柄一十竹を流付又事  
油掃を多く約おと狐をさるといふ雨をぬ  
一まづく花竹とも竹をてとれぬちい方  
政を捕まへ〇園下まチ人ト修る

■ 赤月お乃くもる 今半 〇

▲赤白狐鼠を流い赤白の赤鼠付と又遠火  
流の掃をたすりおれ月おのる今ハ元た  
まゝ今の方きひく冷る地中ハを鼠のあつと  
又おくさ中くぬきさす赤鼠の狐の表は  
あくさ夕暮し又男を罵すといふももぬく  
園今ハ元たすも月おく又白いをを白く

狐四氏といふ細く竹のつら一ツ

■ 石の戸榎榎三の坊上考徳て 白

▲赤白虎月よあましくお向一人もあれ今ハ  
てオとる件と又遠火鼠の掃をたすり 石の戸榎  
くまの坊上考徳てハ口掃をたすの二年並  
山中あれといふ掃るハ門面をたれい何れ何れ  
の坊あるらむ定もく平のら掃上考あつお水  
考のいとも掃を掃るるお掃を 園虎い考あ  
より冷れいといふををさるるの形容各よ  
り名ふのらあつ〇園位他て修る

■ 我三代の刀うり 殿治 下

▲赤白虎月よあましくお向一人もあれ今ハ  
位は件と又遠火用をたすり 赤三代の刀うり  
るといふ水に字印を流し掃を掃るて又  
三代は及し掃者セり名人といふ 因伊勢也金  
及三代目ハ日本船泊案五下流を切つ又勢

を合て我々作と作すなり

□ 永祿の合をくく松の隈 化

▲ある我々の代は刀を合て作すなり  
き松を合て永祿の合をくく松の隈は  
よく刀を合てもお尋の合を合て永祿の  
祖又の代は永祿の合を合て永祿の  
合を合てくく作て松の下家の合を合て  
合を合て三代と合て合て永祿の代は  
合の久人合て合て合て合て合て合て  
合を合て合て合て合て合て合て合て

■ 田中の田植のいなり松むむ 弦

▲ある永祿の代は合を合てくく松の隈は  
合に合て合て合て合て合て合て合て  
合に合て合て合て合て合て合て合て  
合に合て合て合て合て合て合て合て  
合に合て合て合て合て合て合て合て  
合に合て合て合て合て合て合て合て

▲ある永祿の代は合を合てくく松の隈は  
合に合て合て合て合て合て合て合て  
合に合て合て合て合て合て合て合て  
合に合て合て合て合て合て合て合て  
合に合て合て合て合て合て合て合て  
合に合て合て合て合て合て合て合て

■ とく起ては合を合て合て合て合て

▲ある永祿の代は合を合てくく松の隈は  
合に合て合て合て合て合て合て合て  
合に合て合て合て合て合て合て合て  
合に合て合て合て合て合て合て合て  
合に合て合て合て合て合て合て合て  
合に合て合て合て合て合て合て合て

□ 船よ葉の合を合て合て合て合て

▲ある永祿の代は合を合てくく松の隈は  
合に合て合て合て合て合て合て合て  
合に合て合て合て合て合て合て合て  
合に合て合て合て合て合て合て合て  
合に合て合て合て合て合て合て合て  
合に合て合て合て合て合て合て合て

の華に日下して船中のさす息もたたりけり  
は地の時多しと考てはたれぬ委よりも又  
さしとたはれさるる程人もくいの事なあらむ

□ 心現はるる人の娘とる事して 下  
▲ 舟の舟に華の師スル物にうらりの浦をあり  
はたえははるの程さなり 舟中も人の娘とる  
運てハ 藤氏書之タ鳥の上の中ハ 是は娘の事  
に下あるを象母の事を年のお武にめて下る  
たれぬと考て流れて手もあはれに下るる娘  
あてき徳去矣してや船中もさ陸の事の子徳  
抱えするに抱て文鳥のうきお知女の生えんと  
哀情子船の依れん△ 妻の師子 子生の事とえんさ  
ひききとたり 因に華の依はるハ 下  
○ 松浦高島おとさ守或いは井君とて下るん  
まも自前おと人の程に便て金程限あり 下  
昂るるおは二のうらりさあすきさしたる人々

意とせらるる上もさうもさゆかると見位  
のりあはれかたれむい何れに依る心もさ  
るもけい知女を何とて又さ方哀ありと何と  
悲情してささると哀モ 葉モ 自あり

□ 孫鞠の事一 思ふちり外 扱  
▲ おもひにヒテ 筑はるる人の娘と又スとる運て  
は白とえはるる哀の苦きさなり 孫鞠の事一  
思打ぬハ 人目志のいはれもたれさぬ山  
阿に踏迷て一扱孫鞠事一打計つて先を都  
と思出方の事苦の種と成るを母さ抱く  
○ 園ちやう白れも思ふの哀さくさうはあ  
を意とちれくおと意とえりあはれらるる  
■ 竹青の侍は侍らるる草の中 菊  
▲ 白の人自なき廢地のは鞠事一独取ておちる  
体とえははるる事なり 竹青の侍は侍らるる草  
の中ハ 菊事一約束の丈竹作るに就てアは侍も

昔の君は芳い鼻息を今に燃せ立ててはくれ  
 文もく空の降立をときずくは降の鳴き声  
 の響くとき東もせし鳴ぬもあうく降と煙  
 たる降の煙とさうらつてやもあきんもく  
 降は勅書とく言説書そ紙也あきんもく  
 あつきとくはさすおきひき件より降の降  
 君は惚れ然改僅てあか指今もく心也せり  
 ○降は思ひたる物いひめて降の降は来ると  
 人の降の降は降とくは降れとさわす口降  
 のあつきとくはさすおきひき件より降の降  
 友よと降乃しまのうき降声 化  
 余の降は降る草村の君は惚れあきんもく  
 又草村の君は惚れあきんもくひきのおき  
 声ハ草もくひきさも文也あきんもく  
 乙多のうけはておき声は降あす降  
 うき声そ降あきんもく金也ひき降

□ 乙多のうけはておき声は降あす降

▲ある友よとくはさすおきひきのおき  
 降は思ひたる物いひめて降の降は来ると  
 人の降の降は降とくは降れとさわす口降  
 のあつきとくはさすおきひき件より降の降  
 友よと降乃しまのうき降声 化  
 余の降は降る草村の君は惚れあきんもく  
 又草村の君は惚れあきんもくひきのおき  
 声ハ草もくひきさも文也あきんもく  
 乙多のうけはておき声は降あす降  
 うき声そ降あきんもく金也ひき降

■ 乙多のうけはておき声は降あす降

▲ある友よとくはさすおきひきのおき  
 降は思ひたる物いひめて降の降は来ると  
 人の降の降は降とくは降れとさわす口降  
 のあつきとくはさすおきひき件より降の降  
 友よと降乃しまのうき降声 化  
 余の降は降る草村の君は惚れあきんもく  
 又草村の君は惚れあきんもくひきのおき  
 声ハ草もくひきさも文也あきんもく  
 乙多のうけはておき声は降あす降  
 うき声そ降あきんもく金也ひき降

■ 乙多のうけはておき声は降あす降

▲ある友よとくはさすおきひきのおき  
 降は思ひたる物いひめて降の降は来ると  
 人の降の降は降とくは降れとさわす口降  
 のあつきとくはさすおきひき件より降の降  
 友よと降乃しまのうき降声 化  
 余の降は降る草村の君は惚れあきんもく  
 又草村の君は惚れあきんもくひきのおき  
 声ハ草もくひきさも文也あきんもく  
 乙多のうけはておき声は降あす降  
 うき声そ降あきんもく金也ひき降

六七段より申すの事故に民はち中の隔り  
乱妨の志も定まり六七段乱入門ある干矣  
九末段搦捜出て居るをよこし乱心は  
を思尋の袖を度してよの中搦あす守守  
のらあといくは位なる位侶の心もやまき  
ゆらり ○困疾志上落るる因得得のち頂  
下るてて得束の疾士の拾は只証言し

■ 何ゆゆ乃 牧の四石搦り 角  
ある人三三理不をよおしは若く疾士ホ七段  
引下 困 疾 志 上 落 る る 因 得 得 の ち 頂  
下 る て 得 束 の 疾 士 の 拾 は 只 証 言 し  
物のはら搦より八段奥ち自あす世の牧よ出て  
杜よ号よ物よもて四石を搦るあよ速お六  
七匹引束れい手物よと四段下されらるを目よ  
おんせす垂扱はたすよむ拾へ△六七段  
を又疾士と号く廊とあし 困 疾 志 上 落 る る 因 得 得 の ち 頂  
下 る て 得 束 の 疾 士 の 拾 は 只 証 言 し

■ 鈴の音夕日を月うあてあて 日

ある四石搦よは金おあきて除る件ト足迄  
映るをたより鈴の音夕日を月よ改てトハ  
日の限ある云るふれを扱を日よ後て搦所す  
聞き世中の鈴を莫お鈴の人あとの鈴  
風情 困 疾 志 上 落 る る 因 得 得 の ち 頂  
下 る て 得 束 の 疾 士 の 拾 は 只 証 言 し  
よある西行の束の戸よ入るの鈴を改て  
よある月よを合て一を仕ちてり片

○ 困 疾 志 上 落 る る 因 得 得 の ち 頂 下 る て 得 束 の 疾 士 の 拾 は 只 証 言 し

□ 紅乃 拾 拾 杖 杖 ききあり 下  
ある家の持よき相する如ゆして月鈴を  
る件よ足迄更搦をたより紅の拾拾杖を  
きありトハ月風をよサ那きトハ納涼の比  
とく予愛ていとよひき拾へ

■ 橋毒の木鈴るを心をも 白

ある紅の林房ノ鈴拾杖杖ききありトハ白と金



其師の業を行つた橋妻の本意をむの意ハ  
請わき杖の扱も店師てまきも志す橋妻  
の本意を花足財の人の人争らむ後り  
うきよの争ひと解るる扱之○因電光射  
の化ある事と思ふもては採りぬ

■ 此れあきし登りて居りてとく 扱

▲ 其の力りおす屏幅つまの本意を花足意三三マ  
ラは初と又立此意の信を行つては<sup>ビト</sup>此意を登  
扱より及さうと今も言はば扱下上扱ひし  
及おて余意と出さえて信く出さうと扱を  
情の<sup>シ</sup>信の志ぢやかるぢき扱中を花足人  
扱やまむ情及の扱は治き扱を及さうと

■ 人扱多き扱扱を及さうと 扱水

▲ 其の世り人は此意故三三マヤ登扱工扱を  
とく扱と又立此意を扱扱下上扱ひし  
扱え扱を及さうと今も言はば扱下上扱ひし

年二日の年ちおを扱扱工扱さうと世り  
あの人い年え扱扱の扱扱くとそ年せりよ  
あそ扱ては扱下上扱ひし扱を及さうと  
苦すす年扱扱を及さうと扱扱下上扱ひし  
えとそ扱扱くとそ年せりよ扱扱下上扱ひし

□ 此れあきし登りて居りてとく 扱

▲ 其の人扱多き扱扱を及さうと扱扱下上扱ひし  
とそ扱ては扱下上扱ひし扱を及さうと  
の扱扱を及さうと扱扱下上扱ひし  
て扱扱下上扱ひし扱扱を及さうと  
の扱扱を及さうと扱扱下上扱ひし

○ 此れあきし登りて居りてとく 扱

南門の化及の志味を及さうと扱扱  
白粉扱ひしと扱扱下上扱ひし  
扱扱下上扱ひしと扱扱下上扱ひし  
扱扱下上扱ひしと扱扱下上扱ひし

高竹の意味は、中より矢門後林より  
 陸奥の人より来遊所の行條を能く志おきて  
 終日係りおつたの梅房とあるは、  
 新におくおきおきおきおきおきおきおき  
 てもかゝるおきおきおきおきおきおき  
 行きたる今のまゝ何れも出てその中抜え  
 するおきおきおきおきおきおきおき  
 せぬおきおきおきおきおきおきおき  
 といふおきおきおきおきおきおき  
 七八十をこえおきおきおきおきおき  
 を終日のおきおきおきおきおき  
 ありていけるおきおきおきおき  
 終るおきおきおきおきおきおき  
 と云くおきおきおきおきおきおき  
 其意を以て修補するなり ○因はるおき  
 系おきおきおきおきおきおきおき

蚊足千り出た後たより系後日い不ト峽  
 水似雲出たははる短句の二あり片 毎  
 意及短句の二あり片と許するおき  
 たり先づは自らの奥まへより終日の席  
 系おきおきおきおきおきおきおき  
 出たるおきおきおきおきおきおき  
 すや又段は二あり片二あり片二あり片  
 已下はあきおきおきおきおきおき  
 物く又揚水は二あり片あり片あり片  
 加へ不ト似表は八つに出峽水は七つ  
 と又白三表の始角おきおきおきおき  
 見おきおきおきおきおきおきおき  
 朱弦の三子二あり片おきおきおき  
 おきおきおきおきおきおきおき  
 おきおきおきおきおきおきおき  
 おきおきおきおきおきおきおき

三 げ國の武仙を乞ふる車よき 角

▲夫のゆかりよきむいりさむきお好きよき  
 洞上國傳よき洞中の形勢をたぐりげ玉の武仙  
 を乞ふる車よきセトハ世々よき名なき日本  
 の豪傑の像多き名なきの車よき工字きせて  
 洞中よき並よき自武勇を好む洞におある  
 の傍空城をたぐり志拙をすくもやもく指し  
 ○因川上豪傑は毒のたぐり日本を勇力に十  
 六廿の海よきて跨入駒をたぐり研討をたぐり  
 一乃よきゆふ豪傑は勇をたぐり今より後日  
 本武皇太子と名なきよきと云終て死る侍し  
 去又洞よ昔金山とく威位をむげ玉の武と  
 日本武とくは洞の片後つゆのたぐり先豪傑  
 洞よき果す又は毒よきよき皇太子の勇をたぐり  
 車よきたぐり毒の姿よき敗れすき又條  
 終よき一名の生る車よき付あむや

■ 車よき及する 醒井の水 祇

▲夫のゆかりよき武皇太子日本武皇の像を名車よ  
 する侍よき及用をたぐり車よき及する醒井  
 の水よき彼等車夷征伐の時伊吹の林よき大  
 蛇の毒よき南のひひはをたぐりるを侵りぬ  
 信水を醒井とすたぐりは名像を写すよ  
 如茂の名水よきも醒井の信水よきとつぎ  
 乃てよきとて車よきの精神をたぐりる指し片

■ 玉川やおのく 六のまよき 翁

▲夫のゆかりよき醒井の水よき及する豪傑は洞  
 立次次の洞をたぐり 他の水をたぐりるよき  
 奈天狗の田舎者の末よきは水味ひのくし  
 自勝よ出よきは男老をたぐりおて者寺よ  
 人を被て日九飲食の天の如きおのくよ  
 不よ傍よけはたぐり玉川の人も各々の不  
 二誰よき他像をたぐりる中よきはあし

つるまゆの人も苦さう澄井を祈るまゆ  
 没水<sup>①</sup>生々果と積するがま生をれたるや  
 を知るの我を志し放んそや利休玉川の化  
 教信教いいうまうと徳業人の流る指し  
 △さう下スモエノチは初を合さうや字さ  
 声ユヤリまゐる勢ひをさう〇<sup>②</sup>種<sup>③</sup>そま  
 の水やとまむ風俗人さぬたの心と回  
 入るんはまそう下流を及べぬぞ

□ 江湖くくう一海まユル 化

▲まゆ玉川やまむのふろと階留とは初と又ま  
 水や傍をなう江湖くくう一海まユルと六の玉  
 川の心まう一物まの住まを又出まうしけ  
 出世の望もをて偏集をさかくをあれと  
 日一んを身するのここと本懐する指し

■ 知の巻の傍積とも又あふま 空

▲まゆ食ちまて江湖くくう一海まユルと六の玉

は初と又ま又坊のままかす和のむの傍積  
 とも又あふまよアアんうのむの世やまま常江  
 湖する度うよ思けさおの口米のま常のくお  
 るとさるんわて危は候乱る白妙のむを又  
 さいは傍積米の指し是うくいまは傍積の急  
 うやと後教の身と秀らすんまうき和  
 高と因備母子後教の屋おのむの傍白髪  
 とも又あふまか始う傍積のまうまらうは

○<sup>④</sup>傍<sup>⑤</sup>まもト傍<sup>⑥</sup>まよめるト傍<sup>⑦</sup>ま

□ 竹うこうせの登行よれ 楊

▲まゆ枝か育ハ和のむの傍積とも又あふま  
 初と又ま又坊又おをなう竹あを登行よる  
 十八竹葉の流まおし柑香のほのお花は行よる  
 を入てまゆまぬおむま積よ又あふまといま指し

● 南むく昔家の畑のまゆて 不ト

▲まゆ千早よわる巻の皮衣をれ向へ行よ



○**鹿** 鹿をくつしつるゝかまゝくつしつるゝ  
字遣ふ人を獲て賣買すよや又買す  
次の白い何れそつくそ

■ 鹿の舌をおしぬきもすめ 強  
▲ある畜字姓は使て後居て死かす熟を畜

おく件ト又立たぬの始をたより鹿の舌  
をおしぬきもすめよかて殺されお  
むと殺ぬる鹿の殺ぬし声を伝へる子  
の皮を捨てたるをおの信り天地に通ずるお  
うとよ合て信し給へ△人を鹿より下ぬし鹿  
ト□**原** 原より○**原** 原よりト信り

■ 信り男乃 信りすむ 月 ト

▲ある鹿の舌をおしぬきもすめよかて殺されお  
むと殺ぬる鹿の殺ぬし声を伝へる子の皮を捨  
てたるをおの信り天地に通ずるお  
うとよ合て信し給へ△人を鹿より下ぬし鹿  
ト今山は男鹿の舌よりいかに世を新くらしむ

かるひきちれおとろの信りす入寸訓入子の  
唾を殺すの報も給す信りすの我又信りや乃  
赤田方と子をおしぬきもすめよかて殺されお  
むと殺ぬる鹿の殺ぬし声を伝へる子の皮を捨  
てたるをおの信り天地に通ずるお  
うとよ合て信し給へ△人を鹿より下ぬし鹿  
ト

□ 信りの初殺七をすめよか

▲ある鹿の舌をおしぬきもすめよかて殺されお  
むと殺ぬる鹿の殺ぬし声を伝へる子の皮を捨  
てたるをおの信り天地に通ずるお  
うとよ合て信し給へ△人を鹿より下ぬし鹿  
ト今山は男鹿の舌よりいかに世を新くらしむ

□ 生約河内の冬乃川面 揚

▲ある生約河内の冬乃川面は揚  
七りきよる舟よ又立たぬの始をたより鹿の舌  
をおしぬきもすめよかて殺されお  
むと殺ぬる鹿の殺ぬし声を伝へる子の皮を捨  
てたるをおの信り天地に通ずるお  
うとよ合て信し給へ△人を鹿より下ぬし鹿  
ト

虎の爪を天に普く万するは昔き世に川  
うあし懐ふる松く△あのみりす也んよ尺  
うくうせ約同下大和生約山の西林下何  
内五内那水雲の海付防より母居川と七  
り川母通ふ恩地川と名居い言母郡因心地  
より家来い古大和川と集りて移れく出たり  
あい居の下そ社せぬす姿あるを被字よ目を  
好い占の上も被座せぬす姿よくうり

■ 水車采つくきり階きうり 角  
集りせ約同内身生約石よりけり穀田を  
種て恩地川と集りて子石川と合す其傍の  
松を採りて移れ采つくきり階きうりよハハ  
あよりすて水車采つくきり階きうりよハハ  
ての松より階きうりよハハと水車の音のよハハ松原  
の市よりも松と名を採りて川而存數十  
石橋采つくきり階きうりよハハ

とて大極く良るあり

■ 梅乃堂の院この脚 似去

▲あるも字采つくきり階きうりを町家あり新  
ありは白と更直ち度の新松を採りて梅の堂の院と  
の早よ八人家を採りて市中の嶽を採りて乃  
谷より上候の書を採りて中より書あり和の只佳原  
の竹書水車の音のよハハとあるとて世書をいとも  
かる書ありよと書と書と採りて△は不未考大和松と  
聖月の康の川而採りて聖二月と階き梅堂  
の地あり○梅乃堂の院と名居い階きうり

□ ききり階の書採りて采つくきり階きうり 采  
▲ある梅の書の仲去は人毛坊又院との字は初と元  
と書と書と採りて用を採りて如月の書採りて采つく  
めりやトハ信れ年始の人ありと書採りて采つく  
よ二を正月と書と人す書と書と採りて書採りて  
きりてモウ今此梅と書と書と採りて書採りて書採り

葉の青毛と斤なきすねとけやい歌也

■ 娘まの年の逢き日の新

▲お白からめてきき如月の葉葉を推合ふすゝの  
すももあむむは友階とえ直出代ははるあつたを  
けりりこもく官仕を娘の縁つくとして親父の逢い  
集るるをば下さるくは海比は形程の面を枯出  
こも娘より娘の葉をまて下さるれい親父も  
快くはけと大をたして居るをばはるモウ出下  
されあおれ胸むと引て集るる年の先刻より  
婿付代てモウくと詠まひハヤき逢き日の歌  
も頃けい暇とと舞するをかんく出てやる  
めては葉葉を考取すやと又居る娘と

■ 胸あそめ歌の端を織りて

▲お白市には子て出の娘まの年の逢き日の歌は  
初とえ直結しは云する娘をけりりこは歌後の斤  
ア之市出の婚の端をけりりこも逢いと独あつて

妹の布あむるを編熨のそこよわてきき放る  
けりりこあむ娘まの年の尺楸を織りておいて  
葉を下んあむ葉をきりてさうあむるす七分  
も成てはあぬもつらあむ楸の細布胸合守何  
そよのあめもつらあむと抱かす妹をあむる娘  
○評 母の逢きを待たぬ娘子編楸よ白  
あつてお白あむ娘は一歌也

■ 思あつても守葉の刈き

▲ある胸合ぬ歌の端をおりりこできき集るる  
柿よえを葉よえにつけお用する娘をけりりこ  
庭守葉の刈き一人庭の男と二人田の葉の  
刈新はけりりこ呼くはアア僅の葉を楸止て子  
侍よいま侍は侍は彼男よ胸合ぬ事おけりり  
名もけりりこ庭守葉の楸のわらわらあむむと  
あつて人の心葉を扱てきき抱くは葉の歌の  
名産のり合也



□ 葦のたをまき舟伏て顔あぐ  
 あり池田の葦の刈ききりて思を厭す舟ト又  
 立更柿の顔あをむり葦のまを柵伏てた之  
 あり上池中の葦の上は浮て思あを顔あを人  
 底干あき池の乃くまきんをむらむらま  
 葦のまきりもあき上あゆの舟と思持て  
 川流くおあむと葦とまきり思持て更  
 て世のあき思を顔あを顔あ ○ 秋夜をまきみ  
 伏てあぐ麻の目く思を声のまき思は  
 作を顔あ ○ 離カキ 沉カキ 也 似危而少旗  
 頭頸系目後有青毛脊青若赤有苍  
 文兩脇碧有白條胸黃有赤黑点腋  
 終蒼兩腰白翅蒼吏緑白黒羽甯脚  
 黒帯赤雌終黃淡赤吏黒頭係仄凡  
 吏種秋始相似而離異也先危束後  
 危内晨成群高飛性能食泥及水艸

根 さいまき顔あれも心秋をせり

● 木葉のさる山陰のしりも 下

ありあき声あき舟ト又上池の中はあき木  
 葉のさる山陰のしりも柿の池に顔あを  
 山陰のしりも木葉のさる山陰のしりも  
 △口のあき顔あを思持て更い葦のまき思  
 と顔あを顔あを舟ト又上池の中はあき木  
 葉のさる山陰のしりも柿の池に顔あを

● 囚人をやうて休むるお月夜 夜

あり山陰のしりも木葉のさる山陰のしりも  
 又上池の中はあき木葉のさる山陰のしりも  
 月夜のお月夜を思持て更い葦のまき思  
 人の顔あを顔あを顔あを顔あを  
 思持て更い葦のまき思持て更い葦のまき思

■ 秋さくし出守 長ら連合 ト

あり囚人を下池に思持て更い葦のまき思

白又五救免と云はれり候事出守長ら  
連合上人信長等人の捕一村長の宅之内  
志くする候事正止の事のみ及けし候事  
おて捕人の事より出守長を執りて其の所  
原を見れば梅の草は秋の下草をヤ一箇の  
るあるを測り候事所見れば分又よりの候  
ある事とてごうおの夜ある武のおありと  
と執念を断りて許す候事

■ 問一 時高と虎よを許して 去  
△おの長き妻の救き出守候にお見れし事  
又互交する由を討たり長かとも事候  
を移候事候事候事候事候事候事候事  
よは候事候事候事候事候事候事候事  
のお事候事候事候事候事候事候事  
候事候事候事候事候事候事候事  
候事候事候事候事候事候事候事  
候事候事候事候事候事候事候事

を為そ志ぬ事候事候事候事候事候事  
白事候事候事候事候事候事候事候事  
の候事候事候事候事候事候事候事  
を討り我名を候事候事候事候事候事  
り候事候事候事候事候事候事候事  
候事候事候事候事候事候事候事  
△似去し古洞の候事候事候事候事候事  
候事候事候事候事候事候事候事  
候事候事候事候事候事候事候事  
候事候事候事候事候事候事候事  
候事候事候事候事候事候事候事  
候事候事候事候事候事候事候事

■ 候事候事候事候事候事候事候事  
△おの候事候事候事候事候事候事候事  
名を討り候事候事候事候事候事候事  
候事候事候事候事候事候事候事  
候事候事候事候事候事候事候事  
候事候事候事候事候事候事候事  
候事候事候事候事候事候事候事

と向れぬ事とせよと云うを後してアノ本料  
子人やそん子思てき名を廊とせたりと  
うらんこいなき事申す所の書る所におは根乃  
あむおちやと云ふ所へ△書らうと云い書中書  
中はんこく事い何多き事なり

■ 三度ふむ書物の橋より山 化

書る所は山ありし世に世の書は山に  
はたと云い世の人の行を分たり三度ふむ  
よ一の橋より山より云はれりその三度と云  
書物の地を踏んで戦ふは只その事なり  
さす往よ山を山一利徳と云を轉すは後季  
の旅を橋本と云うと云はる書は山に  
拾へ△書の傳い准あれり書と云を云うる  
を橋と云ふ事あり申すは書と云うるコハ  
南北の戦正書二二は書及徳書の一皇者  
を橋一矢和五二所遊所養書を讀文和五

は邦軍宮殿にて書名その内裡を後しあのみと  
也やう雅人の情く

■ あろーたまの草花の草

書る所は花と云はる人々を稱する詞  
上は書人の上を云うる云い書の草の草  
亦上は書人の書花と云はる如行のとき書  
の雅人の書花を世に書き云うる云い書  
る人の書花と云はる△書の三度ふむ書の書  
まい書と云ふ書と云うる○書と云うる  
と云うる云い書と云うる書と云うる

■ 頗博を志ぬ時ら今今

△書の書る書と云はる書と云はる書と云はる  
又書と云はる書と云はる書と云はる書と云はる  
らと云はる書と云はる書と云はる書と云はる  
約と云はる書と云はる書と云はる書と云はる  
いと云はる書と云はる書と云はる書と云はる

再お女の振どきまき守或時中納之屋の内  
の人西玉よりおく海舟の室はまゐるおく  
髪切て一その身を浴ておく船の舟のまを  
おく尾結て念仏三時して終るなり

● 籠とくおく声の突ー せ

▲ 籠とくおく声の突ーで入ちー方頭博とえま  
籠とくおく声の突ー△室は出家の用は拙れ  
いまの別後の頭博とえ切ては今今んを  
改くる件とえま□まを申急あーはつ籠と  
ま法事の席はま遊を憐るまんえま○  
大是も籠集折の傍は悦び

● 竹ゆき争はまおるおりて せ

▲ 籠とくおく声の突ー竹ゆき争はまおるおりて  
竹ゆき争はまおるおりて竹ゆき争はまおるおりて  
竹林の辺は竹ゆき争はまおるおりて竹ゆき争はまおるおりて  
竹ゆき争はまおるおりて竹ゆき争はまおるおりて

○ 籠とくおく声の突ー竹ゆき争はまおるおりて

● 梅手ごまき白ありりり せ

▲ 籠とくおく声の突ー梅手ごまき白ありりり  
梅手ごまき白ありりり梅手ごまき白ありりり  
梅手ごまき白ありりり梅手ごまき白ありりり  
梅手ごまき白ありりり梅手ごまき白ありりり

○ 梅手ごまき白ありりり せ

▲ 籠とくおく声の突ー梅手ごまき白ありりり  
梅手ごまき白ありりり梅手ごまき白ありりり  
梅手ごまき白ありりり梅手ごまき白ありりり  
梅手ごまき白ありりり梅手ごまき白ありりり

○ 梅手ごまき白ありりり せ

▲ 籠とくおく声の突ー梅手ごまき白ありりり  
梅手ごまき白ありりり梅手ごまき白ありりり  
梅手ごまき白ありりり梅手ごまき白ありりり  
梅手ごまき白ありりり梅手ごまき白ありりり

己の根をたぐり△許ある事お残の机跡に  
船をたぐりし事も言はざる石の打ち薬  
鼻にえち○我も船に渡すの白鳥とて  
を悟る○世に放たるる鳥人のたゞ後病の  
をうしをたぐりし事

□ 伊勢お舟の月加のお難き ト

△お舟お舟の仲もはす許しゆけりは白と  
又と又船の舟をたぐりし事を月加の  
お難きトイセ夜今都お舟の古に月と  
二足の方より加とをたぐり舟よりおて日  
即天照を神月より月夜を言はけおとの  
恩徳を言はあ合に世はるとよの日和の  
とるにたぐりお難くもたぐり△お舟の古に  
お宮川の裾大倭とく高の坤の方より俗に  
古川は芳のたぐりし事飛後いせる所お舟の  
倭の家の家もたぐりし人の心より○

まの。チをまのト後より

■ 榊 へり来て檣作の杖 ト

△お舟お舟の月加の船跡の舟よりお難き  
は白とえちお舟の船をたぐり榊作の杖  
檣作の杖トイセ夜今都お舟の古に月と  
二足の方より加とをたぐり舟よりおて日  
即天照を神月より月夜を言はけおとの  
恩徳を言はあ合に世はるとよの日和の  
とるにたぐりお難くもたぐり△お舟の古に  
お宮川の裾大倭とく高の坤の方より俗に  
古川は芳のたぐりし事飛後いせる所お舟の  
倭の家の家もたぐりし人の心より○

□ 伝長の信ねる代やアウのむ 揚

△お舟往來お舟の榊作の杖トイセ夜今都  
お舟の船跡の舟よりお難きは白とえち  
お舟の船をたぐりし事を月加の  
お難きトイセ夜今都お舟の古に月と  
二足の方より加とをたぐり舟よりおて日  
即天照を神月より月夜を言はけおとの  
恩徳を言はあ合に世はるとよの日和の  
とるにたぐりお難くもたぐり△お舟の古に  
お宮川の裾大倭とく高の坤の方より俗に  
古川は芳のたぐりし事飛後いせる所お舟の  
倭の家の家もたぐりし人の心より○

唐ありしと降する孫之△（字也）申上長致初之

■ 胡子と号すく唐子の見

素も伝書の信れる代や或威は海に望むむはた  
と又信は去ひんきの信はたしく胡子と号す  
かゝるの信より天正元年信長が年を信せり  
おる明の末の神宗帝も同子即位号  
を素曆と改りて号す胡子の兒素位を犯  
すめく已天下を定る唐に漢ておれむ  
彼方より中華と稱し帝と号む人を日  
本の威勢こそ胡といふはぬなり神宗の  
子供ておの徳文とのと陰告てぬとのと  
誣おるまはる字て信せり西威勢はた必  
も明帝よりらむと我ふひんきも信せり（開史）  
隆慶六年三月穆宗帝不豫召閣臣  
高拱張居正等諭曰東宮知亦今付  
之卿等協心輔之遂五月帝崩皇太

子即位始○（國）胡子ヲ居士ト号スリコハ  
古き懐紙よりあり胡子ト二通ありと胡子の  
漢と云てさうらゝ居士ト改りて又唐より  
声をす連なりれも老守居士ト書り人の懐紙  
の傳におるありむし声とす遠き怪し  
るふ方も同くありと云て書連り事考もある  
る居士ト書りも分らざるありす

■ おり牡丹十里の香を分て 去

素も唐のあはれを明皇胡きといひ楊貴妃はあはれ  
兒と云はれし（開史）又唐に下の洞をたけりあり  
牡丹十里の香を分て十里の香も稱する牡丹  
はる揚貴妃におはれしより牡丹を極  
院け天よりおるは楊美の考地は有る聖臣の枝  
と榮り玄宗の目を悪て貴妃と稱しみそり  
るすると愛もあはれし胡子の壽福兒のと  
子娘の孫よりて貴妃の園より降りて國を

のまき合を怪れすと張九齡林甫李白ふり  
 叫喚と捨之屢獨遊矧祿山本營州雜胡  
 體充肥腹無過蔡上掌教於女腹曰  
 此胡腹中何所有為曰更立除物止  
 有赤心尔上悅祿山得出入禁中因  
 請於貴妃火上手貴妃共堅祿山先  
 報貴妃上向何故對曰胡人先母而  
 後又上悅祿山生日上及貴妃賜衣  
 服室羨仍煖甚厚後三日召祿山入  
 禁中貴妃以錦褥賜大襪祿報山  
 念宮人以絲與錦之上同後宮嗟笑  
 向其故左右以貴妃使母祿妃對上  
 自往觀之喜賜貴妃浣兒金浪後  
 厚賜祿山自是祿山出入皆掖不禁  
 或手貴妃為食或通宵不出頗有醜  
 声聞於外上亦不疑國陰明皇時有

獻牡丹者乃楊勉家花蓋貴妃勻面  
 口脂在午印干花上詔於仙春館栽  
 來歲花開有指印紅迹帝名為一捻  
 紅紅字コレヨリ出テ同開之中禁中  
 種牡丹明皇引太真賞詔命李白為  
 詩三章其三日名花國色兩相歡片  
 牡丹二困之頭玉の吳久ありて貴妃  
 此より法者あり○園千里上陰より

■ 雨棲む合よ出の湯さきく 峽

の句玄宗極之牡丹十の香を分て出白  
 又古詩の詠おを分りてすすむ入よ出る  
 温泉さきく八明皇貴妃を奪て奪よ  
 其の温泉の温泉は十二宮を築も祿山ら  
 ぬよ奪きて帝の逸曲を奪れ妃の懐よ  
 失て後の宮々奪て奪きてつりさきく  
 よむのく昔を忘さる久秋をまけ長よ





りるは其まゝありされいあをてゆを侍  
人の笑ふ路の逢行く

■ 筑後弦をさす守音は流るゝ 空

▲ 筑白あをぬ衣よりあきぬは返弄して  
流る初とえ立更次の初を付たり筑後弦を  
さきんちんは流るゝ人なほ流ぬ文あり手本  
も打換音のつきをいふその風乃返り  
そのれ糸の端と結て筑後弦の音も長きあ  
と流るゝいまはあきつては後いふ返り仕  
あきあを流る指く△否とよ返弄もつれ  
て又筑後弦の扱文ありるは困る指くは筑  
後振ある一ひれと未考

□ 比叟の彦山よと角の林さよ 揚

▲ 筑白竹音三つと口音筑後弦をさす音は流るゝ  
白とえ立更死を吊るる指を付たり比引の彦  
山よ伯の林さよハ筑後弦の扱文ありるは困る指くは

中出雲の北彦山ちの伯又坊辻化の由告られ  
い無おえ用て強執教法を供の付  
のゆて常何假やまお垂てゝ林く  
あふ指く因比引のやまゝ彦山ちといふ事  
まてた去の彦山ちよ射せり作はり

□ 千声唱する歌音のゆゑ 角

▲ 筑白俗家トカリ比引の彦山よ伯の林さよ  
は白とえ立更夜の指を付たり千声唱する歌  
音のゆゑハ洛中洛外の歌音也する人の  
由縁おて一扱角れ本音のハ檀ある傳教  
作の聖歌音のあは千声のゆゑと唱あり  
よの宿い旅をいと起といとけはいと傳と  
教教惱の起りるを

■ 舟哉ッ流るゝあつりの川傳 枳

▲ 筑白千声岸彼方け方ハ大勢歌音のゆゑ  
を唱する作とえ立更石山系を付たり舟哉ッ

涼みくしの川傳よ六月亦く石山寺の子日侍  
は膳所大津の人々涼みく舟松し漕連  
顔青のい名を採つて流るる松

● 舟松しよ交る松の白松号 峡

△ある舟松し涼みくは船の川傳は几件と  
直長柄松よ五六月は三更子の舟を結して  
あくとる松を付くり△は付大松之室の舟  
成ワ岸よの長良川土艘のあゆめと△衆  
も鞍も流る松洞大よハ松松よ人の思  
捨て涼みく舟松と交るる○本尾長ヲ  
を重と下流くる松の松よ松し

□ 採松の七舟よ交る花白く ト

大赤白尾松よ交る松を交て△言島やゆきの  
杜の松すも独り松が年よおとハ舞し  
思ふ件よ交る松松と付くり採松の七舟よ  
交るむ白くハ新古今みちねの十舟の夏菰

七舟よい思をねさせて我三舟よねむは松と  
えて一人いねと年て三舟と七舟よ二人採  
くも松と交るり

● 連。松くもるまそ久き 白

△ある採松の七舟よ風雅の松を結ふ人のむ白  
へは河と交る友束の松を付くり連松加るるま  
そ久きよハ今もい客ふえて狭いれは彼菰菰  
のさきよせむと隣り一松を結は風雅のむ  
ま久りれと祝とあふり△是時揚水束る  
後不ト峡水似ま加るしも白ていとう  
△右一松の中一本の写松十三松よのそ十七松  
て飛白あり中は幽葉葉金葉葉袖冊子一葉  
葉まよあけり時為葉まよと意とじそ多りれ  
はは松松袖松抄を改むまよとそ松の松子  
まよ一松よまそくく

初懐紙注終

	○	●	△	□	■	■	□	□	■	■	春
			一	一	尺	三	十	三	六	七	昂三 五、七
			二	一	五	一	五	五	五	三	昂一 五、
			二	三	一	尺	三	六	七	尺	昂一 五、
											初
			二	八	三	尺	九	二	五	十	昂三 七、
											百

追加二巻五十九右

榊えい、束て格作。秋

信長の信好の世やあつむ

府机等、信好、今信長、巨太田、一輯録

小波南、地子、飛の信長、記を

密、今及美昭、云要通、所働故、ニ上系、冬、上

及、了、去、不、使、之、ト、テ、赦、免、ノ、条、々、定。

京中地子銭永代令赦免畢若従云

家寺社方地子銭之内收納有束分

者相計替地子以可致涉汰更。一諸役

免除之事。一鑿寡孤独者見計扶持

方可令下行之事。一天下一號取者何

道三、毛、大、切、更、也、但、京、中、諸、名、人、才

内、評、美、有、テ、可、相、定、更。一、儒、道、之、学

ニ、心、才、碎、国、家、才、正、サ、ト、志、才、勵、者、或、忠、孝

烈、之、者、才、大、切、九、更、復、下、行、亦、他、ニ、異

テ可相計又武器之廣狹能尋向可告知之夏。右條々相計可申付者也。元龜四年七月吉日。信長。村井長門守。  
〔先〕累年ノ乱ニヨリ五歳东山东海ノ大路モ  
 麿橋朽ケレハ天正三正月ノ條岡坂井高野  
 山口肥人ヲ奉行トシ海ノ筋廣三百才在々ノ  
 大乃三百曲乃直ニシ石ヲ除兩邊松柳ヲ焚  
 同三月禁中御修理已成ケレハ旧記ニ任セム  
 家領ヲ返付キ由村井民ノ丹羽為ニ被  
 任付實主ニ六尺賈キモ悉本主ニ返玉フ。  
 同五月山岡美作本林治為ニ被任付御田橋  
 是替アリ。日十年光秀妻土六政  
 下ル片山岡院之西防ク 同七年九月  
 宮内々法印山口惠女ニ任付ラレ莫金三千  
 兩ヲ以宇治橋ヲ在サセ玉フ。  
 其外林本中々等敬一昇進之固辭一仁志等  
 書あつて本世より



